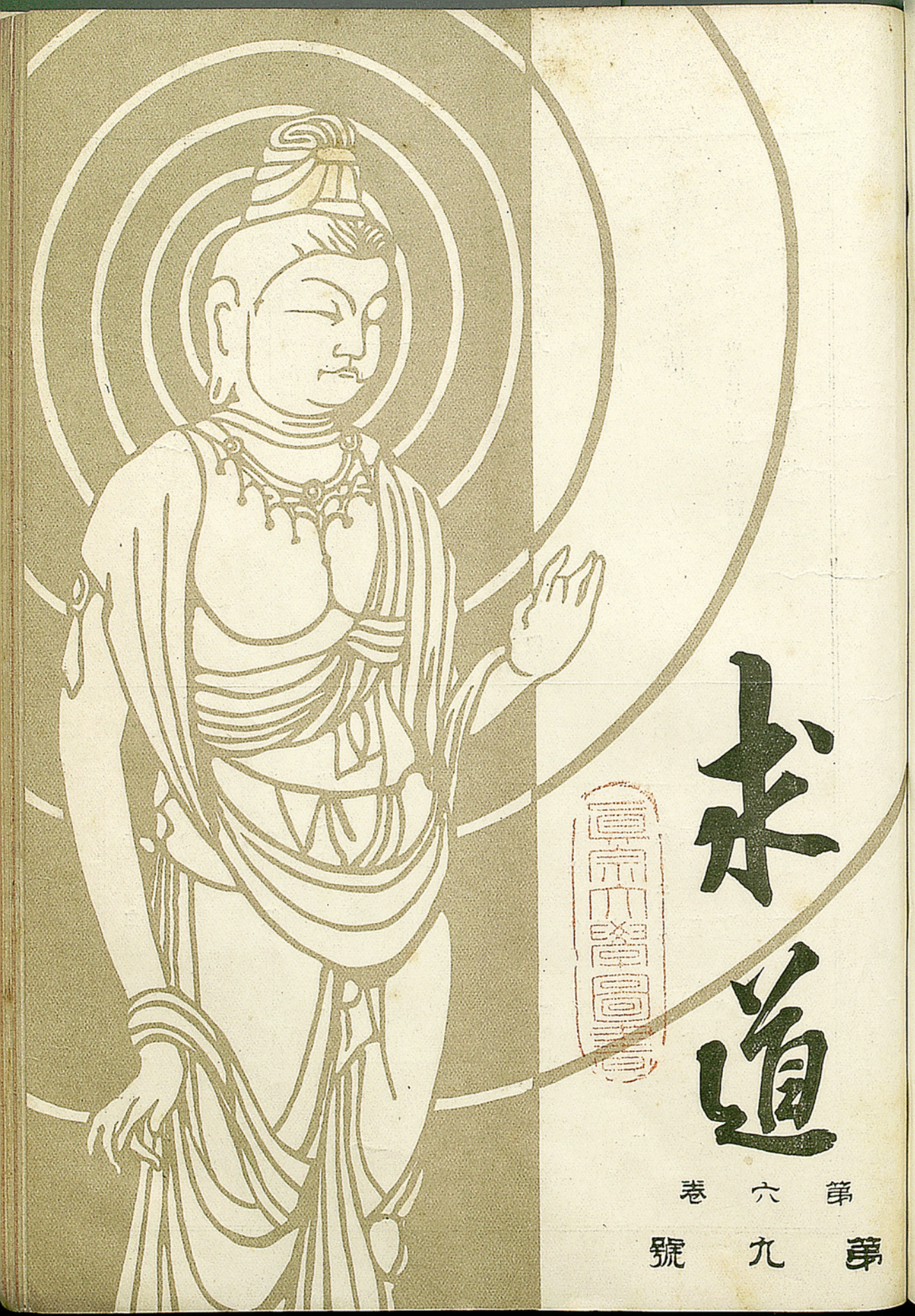

求道

第六卷
第九號

求道第六卷第九號目次

求道

◎慈悲の父母　自督

◎御慈悲にたちかへる　講話

◎長生不死の神方　聖傳　近角常觀

◎ヂヤータカ釋尊傳

第三十三　賢き鳥と馬鹿者の話

第三十四　鶉と猿と象の話

告白

◎故菅瀨夫人の日記

時報

◎關西の旅◎太子言

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午后二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午后七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說教所》

求道　第六卷第九號

慈悲の父母

信仰の一念は大慈大悲の如來に遇ひたてまつることなり、佛の慈悲の御こゝろを信受したる慶喜也、我等群生茫々たる六道に迷ひ、生死海中に漂沒して其從來する所を知らず、其趣向する所を知らず、如來大慈大悲の御心其有樣をみそなはして、救濟の手を下し、攝取の懷におさめたまふ、論に曰く、佛の本願力を觀そなはすに、遇ふて空しく過ぐるものなし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ、讃に曰く、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陁となづけたてまつると、我れ等かくの如き如來の御心をも知らで徒に人生に迷ひ、罪惡に泣き、苦惱に沈む、如來の作願をたづぬるに、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をは成就せり、歎異鈔に曰く、佛かねて知ろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと知られて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなりと嗚呼たゞ如來のしろしめすやうに心をもつべし、如來は能く我等が心をみそなはすなり、飽迄も我等が境遇を知ろしめすなり、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします也、我等何の幸か此大慈大悲の御親に遇ひたてまつる、人生何者か之に過ぐるの滿足あらむや、嗚呼。

聖人常に獲信の慶喜を述べたまふや、必ず慈悲の父母を仰ぎたまふ、曰く良に知んぬ德號の慈父なくんば能生の因闕なん、光明の悲母なくんば所生の緣乖きなん、能所因緣和合すべしと雖信心の業識に非ずは光明土に到ること難し、眞實信の業識是則ち內因となし、光明名の父母是則ち外緣とす、內外因緣和合して報土の眞身を得證すと、是れ名號の慈恩を以て慈父とし、光明の悲懷を以て悲母としたまふ也、又曰く、大慈救世聖德皇、父の如くにおはします、大悲救世觀世音、母のごとくにおはしますと、是れ聖人が磯長の告勅によりて求道の動機を高め、六角堂の靈告によりて入信慶喜の益を得たまひしを感謝したまふ也、故に曰く、救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して、多々のごとくすてずして、阿摩のごとくそひたまふ。無始よりこのかたこの世まで、聖德皇のあはれみて、多々のご

とくにそひたまひ、阿摩のごとくにゐはします。又曰く釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめたまひけりと、是釋尊を以て慈父とし、彌陀を以て悲母と呼びたまふ、信卷別序に曰く、夫れ以れば信樂を獲得するとは如來選擇の願心より發起すとは、是れ如來大悲大願の親心を示したまふ也、眞心を開闡するとは大聖矜哀の善巧より顯彰すとは是れ大聖各々もろともに種々の善巧によりて悲願に方便引入せしめたまふ也、而して如來選擇の願心は遠く五劫思惟の昔より現在說法の今に至る迄本誓重願空しからず、了々として我等を觀そなはす親心也、大聖矜哀の善巧は佛在世の王舍城の悲劇より現今家庭の人生に至る迄善巧方便の御手を下したまふとの種々なる也、嗚呼如來は我等の心を觀そなはして、如來の御心のまゝに救ひたまふ也、如來は我等が境遇を知ろしめして、如來の思召す樣に導きたまふ也、嗚呼我等入信の昔を回顧するに一一皆大悲の御心より來れるとを疑ふ可らず、我等信後の今に至るまで事々に皆大慈の御思召のこもらせられざるとなし、是慈恩に沐し、悲德に浴するもの〻恒に常に服膺すべき所也、是慈光に觸れ悲心に接するもの〻恒に自覺感佩すべき所也。

略文類に曰く、今宗師の解を披きたるに云く、如來と菩ふは二種あり、一者衆生の意の如く、彼の心念に隨て、皆之を度すべし、二には彌陀の意の如し、五眼圓かに照し、六通自在にして、機の應に度すべき者を觀そなはして、一念の中に前なく、後なく、身心等く趣き、三輪開悟して、各益したまふこと同じからざる也、又言く、敬て一切の往生の知識等に白く、大に須らく慚愧すべし、釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便を以て我等が無上の信心を發起せしめたまへりと、明に知んぬ、二尊の大悲に緣て、一心の佛因を獲たり、當に知るべし、斯人は希有人なり最勝人也と、嗚呼如來は我等の心を觀そなはして、其心念に隨て度したまふ也、如來の御心のまに〳〵我等を善巧方便したまふ也、故に各々の機緣に隨て其益を得ること同じからざる也、人々の境遇に隨て善巧亦種々なることを忘るべからず、是れ個々別々に慈父を信じ、慈母に順するもの〻仰ぐべき所也、釋尊の仰に隨ひ、彌陀の召に協ふもの〻各々信すべき所也。

涅槃經に曰く、如來は一切の爲に、常に慈父母と爲りたまへり、當に知るべし諸の衆生は皆是れ如來の子なり、世尊大慈悲衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、

狂亂所爲多きがごとしと、是れ阿闍世王の入信せしとき諸佛の弟子讃嘆したまふの偈頌なりき、而して聖人晩年皇太子聖德奉讃を作りたまひし時奥書に磯長廟下の二十句偈を書したまひて此涅槃經の偈を以て感謝の意を捧げたまふ、是聖德太子の恩德を感謝したまふ也、勢至章に云、十方の如來衆生を憐念したまふこと母の子を憶するが如し、大論に曰く、譬へは魚母の若し子を念ぜざれば子即ち壞爛する等の如しと、聖人大勢至和讃を作りたまひし時曰、超日月光この身には、念佛三昧行せしむ、十方の如來は衆生を、一子のごとく憐念す。子の母をおもふことくにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とおからず、如來を拜見うたがはずと、是法然上人の恩德を感謝したまふ也、聖人曰く、大師聖人すなはち勢至の化身、太子亦觀音の垂跡なり、このゆへに、我二菩薩の引導に順じて如來の本願をひろむるにあり、眞宗之によりて興じ、念佛之によりて熾也、是併聖者の敎誨によりて更に愚昧の今案を構へず、彼二大士の重願唯一佛名を專念するに足れり、今の行者誤て脇士に事ふることなかれ、直に本佛を仰ぐべしと嗚呼。

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ、大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、五劫思惟の苦勞も偏に我一人がためなりけり、王舍城裡の悲劇も全く我を導くがためなりけり、人生如何に苦勞多からんも五劫思惟の御苦勞を思へば須彌の一塵にも及ぶべからず、吾人如何に逆境に處するも王舍城の悲劇に比べなば蒼溟の一滴にも如かざるなり、況んや逆境其れ自身既に如來の恩寵にして善巧の御手の達せざる所なく、苦惱の衆生をすてずして廻向を首としたまひて大悲心を成就したまひしに於てをや、行卷に曰く、猶嚴父の如し、一切の諸凡聖を訓導するが故に、猶悲母の如し、一切の凡聖の報土の眞因を長生するが故に猶し、乳母の如し、一切善惡の往生人を養育し、守護したまふが故にと、大慈大悲の如來は我等不孝忘恩の衆生の爲に本願醍醐の妙味を與へて慈養悲育到らざる所なし。嗚呼、於戲、南無阿彌陀佛。

自督

御慈悲にたちかへる

○我等は仕方のない煩惱熾盛の人間である、瞋恚の滔の燃え上るとき、愚痴の闇に迷ふたるとき、煩惱の氷でとじられたとき如何にするとも其苦を逃れることは出來ぬ、其方法はない、仕方がない、其仕方のない私を現在あり〳〵憫みたまふ御慈悲の在すこと一つが我等が命である、我等の光である。

○其大悲の御親は煩惱の我等を咎めたまふではない、其苦惱の衆生を可愛相であると御覽下さるのである、かゝる我等を如來が御覽なさると氣附きて見れば、唯恐入るより外はない、しかるに如何に恐入りても煩惱の氷は堅まるばかりで融けることはない、しかるに其苦惱の衆生を憫みたまふ如來の大悲大願を仰ぎてみれば如何な煩惱熾盛の我等も唯頭が下りて感泣するのみである。

○つとめ心といふものは、何の益にもたゝぬ、煩惱の起りたるとき之をおさへんとしても駄目である、其おさへきれない奴を哀みたまふ御心こそ我等の心の底まで和ぐる惠である、至心も我等のつとむる清淨眞實ではない、如來の我等に對する清淨眞實である、清淨眞實ならざる奴を見捨てたまはぬ清淨眞實の如來の御心である。

○我等の三毒をみそなはして、無貪無瞋無痴の御心より遂に成就されたる御光が清淨歡喜智慧光である、清淨光といふは如何に濁れる我等の心をも清らかにする光である、如意の釋に一には衆生の心の如しといふは此濁れる我等の心を御承知下さるのである、二には如來の心の如しといふは其濁れる我等を救ふべく如來の思召す通り清淨光を成就して自由自在に我等を濟度下さるのである、和讃に曰く、道光明朗超絶せり、清淨光佛とまふすなり、ひとたび光照かふるもの、業垢をのぞき解脫をう、業垢を除きて下さるのが何より難有いことである。

○歡喜光も亦同樣である、慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ、一讀してさへ心が融ける樣な心持がする、我等瞋恚の心は如何にするも歡喜の心の起る樣なものではない、しかるに春風駘蕩とも云ふべき如來の慈悲の御心を以て照して下さる故に信心歡喜の花が咲くのである。

○聖人は貪愛の心能く善心を汚し、瞋憎の心、能く功德の寶財を燒くと仰せられてある、如何にも火の燒くが如く水の濕すが如くである、急走急作して頭燃を拂ふが如くするも此貪愛瞋憎の心はどても止まぬものである、夫故雜毒の善虛假の行である、しかるに如來不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じたまひし時、欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さずとある、是れ淸淨歡喜智慧の三光を成就したまへる源である、一たび此彌陀佛日の照耀に遇ひぬれば貪愛瞋憎の雲霧はありながら雲霧の下明らかにして闇なきが如くである。

○如意の釋で思ひ出したが聖人が求道得信について父の如く母の如く導かれたまひし聖德太子及其本地如意輪觀自在大士の如意が實に此如意である、一々意味を穿つにも及ばず自然に其意味が此釋に合してある、六角堂の告命にしても行者宿報設女犯といふは、衆生の意の如くである、我成玉女身被犯といふは菩薩の意の如くである、信卷に善導の御釋を引きたまふとき此如意の釋を以て始め、最後に釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便を以て我等が無上の信心を發起せしめたまへりといふ文にて終りてある、略文類には三心釋の終りに此二文だけを引きて結びて曰く、明に知りぬ三尊の大悲によりて一心の佛因を獲たり、當に知るべし斯人は希有人なり最勝人也と仰せられてある、如何に如意の釋に着眼したまひかを知るべきである、名號を如意寶珠に譬ふるも全く同樣の意味である、濁水中に投じて而も濁を淸めて淸淨ならしむるが如く、觀佛本願力の一念に過ふて空しく過ぐる者なし能令速滿足功德大寶海の破闇滿願の德を與へらるゝのである、かく一々味ひ來れば聖人の二十八歳末日に於ける睿南の無動寺大乘院に於ける如意輪觀自在大士の告命に汝願將滿足、我願亦滿足とあるも自然に一には衆生の心の如く、二には菩薩の意の如くである、何分にも源が同一なる故に流を追ふて泝れは結局慈悲の源泉に達するのは決して怪むべきではない。

○私が御慈悲に氣付きたる昔を考へるに、其當時自ら隔て心をとらんとするも、疑心をなくすればよいとは承知はしても事實隔て心がとれぬ、疑ひ心が止まぬのである、眞面目になればなるほど氣をせめるだけでとても安心が出來ぬ、心が和らがぬ、樂にならぬ、所謂はからひ心のみでもちあぐむのである、然るに最後に此疑ひ心の止まぬものを疑はぬ人、隔て心の止まぬものを隔てたまはぬ友を見出したいと思うた、是

即ち衆生の意の如くである、これだけでは安心は出來ぬ、其衆生の意の如くして異れる友も親も見付からぬからである、終に其親に氣が付いた、我等の心を知りて知りて知りぬいた上に自由自在に御意のまゝに其疑ふものを疑ひたまはぬ、其隔て心の止まぬ奴が可愛相であると隔てたまはぬ無碍の御親が阿彌陀如來であると初めて氣付けて下さつたときに重き荷物をおろした樣に大安慰に住することが出來るのである、是如來の光明智相の如く、彼名義の如く、寶の如く修行し相應せんと欲するのである。

○光明は智惠の相である、即ち無碍光の德を得たのである、名義相應して破闇滿願の利益を得たのである、如來は此苦惱の衆生を救はんが爲に一如法界の都より現はれたまふ御姿と佛を知ることが出來たのである、煩惱熾盛の我等を助けんがために願を立て姿を現はしたまひた親樣なりと知れたのである、是れ如來は是れ實相身なり、是れ爲物身なりと知るのである、無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する、頂くところは如來の大悲大願である、無碍光の照耀である。

○此慈悲の御親に氣付くのが信仰の一念である、そして後念相續は畢竟其初一念にたちもどりて御慈悲にたちかへるとてある、此たちかへるのが自分でたちかへれるのではない、我方にては忘れ勝なれど如來樣の方では常に忘れて下さらぬ、夫故御慈悲にたちかへれるのである、煩惱にまなこさえられて、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねにわが身をてらすなり、我等は御恩を忘れ勝ちなるも如來の御慈悲は暫くも眼を放ちたまふことはない、故に如何な忘れ勝ちなる我人もついく御慈悲に立歸らしていたゞくのである、是が後念相續の喜である、如實修行相應の有樣を淳心一心相續心と申されたは、如何にも此御慈悲に一たび氣が付けば常に此御慈悲にたちかへらして下さることである。

自分としては三毒の煩惱の止まぬものを見捨てたまはぬ御慈悲を一たび知らしていたゞいて見ればもはや若存若亡の心なく淳く信する樣になる、かくなれば決定心なるゆへに一心である一心になれば餘念間雜することなきゆへに念相續するのである、源を言へば御慈悲をいたゞく一心である、故に論主は建めに世尊我一心歸命盡十方無碍光如來と申されたのである、此一心が聖人の特色である、和讃に曰く、論主の一心とけるをは、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらか、

他力の信とのべたまふ、天親菩薩のみことをも、鸞師ときのべたまはずは、他力廣大威德の、心行いかてかさとらまし、此煩惱成就の我等を憐みたまふ御慈悲をいたゞく一念が他力廣大威德の一心である、其願力成就の御苦勞がしみ〳〵我等にあらはれて下さるのが後念相續の五念である。

○要する處、如來廻向の本源より來るのである、如何んが廻向したまへる、一切苦惱の衆生をすてずして廻向を首として大悲心を成就したまへる故に、此大悲心か源である、我等は日々此大慈大悲にたちかへりて鑽仰さしていたゞくより外はない、南無阿彌陀佛。

爰に我彌陀獨り凡夫を濟ふの願を發し、殊に極惡の機をすくふ。願を發すに五劫を經、行をなして永劫を送り、如是願行は凡夫をして往生成佛せしめんと也。故に佛の苦行は全く我等がためなり。當さに知るべし、彌陀長劫の大恩海は、一滴として外に漏さず、傾けしたしりて我身一つにかふむれり。堤塘をいたへる水の一沾も、外にゆかざるが如し。佛所修の功德の水は、慈悲誓願の堤をつたひて直に我身の中にあつまれり。發願廻向之義と云へるは是なり。此佛廻施の功德既にあらはれたるを稱讃念の行とは云ふなり。されば無上大利を得ると云ふも即ち此信行を得たる位なり。外に別にあるべからす。

《惠空語錄》

講話

長生不死の神方

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

上

今日の題は「長生不死の神方」であります。此の語は親鸞聖人の『信卷』の初に

謹しんで往相の廻向を按ずるに大信あり。大信心は即ち是れ長生不死の神方。云云。

とある、之であります。言ふ迄もなく長生は長き生命である、不死は死なぬといふ意味である。大信心が長生不死の神方であるとは、一度び信心を得れば永久に長らへて何時迄も死なぬ不思議の法であるといふのであります。其處で今日は此のお言葉を元として、聖人が斯く言はれたる實驗の御味ひをお話致し、猶ほ進んで我々が此の信心を頂く一つて此の世の生命は畢るとまゝよ、何時迄も生き長らへて死なぬ生命を賜はるといふ廣大の味ひをお話致さうと思ひます。

先づ順序として此の御言葉から申します。念の爲め一度茲の御文を拜讀して見ますと、今申す如く『信卷』とて、『教行

信證』中殊に信の一つをお示し下された、其の『信卷』の劈頭にあるのであります。先づ初に、

至心信樂之願

とあつて、之は佛のお慈悲を喜ぶ根底となつて下さる至心信樂の願であります。佛が此の至心信樂の願を建てゝ我々に與へて下された。其の至心の御廻向によりて我々は信心を頂く事が出來るのであります。其の信心をば直ぐ次に十二通りに言葉を換へて讃歎せられて、

謹しんで往相の回向を按ずるに大信有り。……

往相の回向といふは、佛が廣大なる大悲から我々に與へて下さる御回向である。其の回向を按ずるに大信ありて、我々人間の小なる信では無い、絶對佛陀の偉大なる大信心がある。

……大信心は則ち是れ長生不死の神方。……

一度び其の大信心を得れば、永久に長らへて死なぬ處の生命を保つのである。則ち大信心は長生不死の不思議の方である。も一つ言へば我々は信の一念に於て佛の無量壽を頂いて、此の世は勿論、設ひ肉體は畢つても死なぬ處の生命を得るのである。

……忻淨厭穢の妙術。……

信仰以前は人生が捨てられぬ處から種々と苦むのであるが、一度び信心を得れば淨土を忻び穢土を厭ふ心が起る。佛の廣大なる淨土を樂んで、此の穢れたる人生を厭ふ心が起るのである。厭ふと言ふても、厭ひ悲む意味では無ひ。人生に對し執着心を離れて佛の惠みを喜ぶのである。

……選擇回向の直心。……

佛は我々を救はんが爲に、選びに擇つて廣大なる御まこと心を回向して下さる。解り易く申せば、信心と言ひ、まことと言ふも、我々が自分にまことや信心が出來るのでは無い、佛の方よりまことにし、佛の方より與へて下さる信心である。即ち大信心は撰擇回向の御心其物である。

……利他深廣の信樂。……

此の信心は我々凡夫の心では無い、如來利他の廣大なる大悲心其儘を頂いた心故、利他深廣の信樂である。

……金剛不壞の眞心。……

如來回向の信心であれば、此信心は動かず壞れず、實に金剛不壞の眞心である。

……易往無人の淨心。……

之は『大經』の中に「易往而無人」とあつて、「淨土へは往き易すけれども信心をとる人稀れなれば、往き易くして人無し」といふのである。其の得難き信心を得る事故、易往無人の淨心である。淨心とは、凡夫の穢れた心で無く、如來淸淨の御心故に、淨心である。

……心光攝護の一心。……

信の一念に於て、佛の心光中に收められ攝取護念の利益を蒙るのである。故に心光攝護の一心である。

……希有最勝の大信。……

此の信心は外に幾つも有る可き信心では無い、唯一無二の絶對の信心故に、稀有最勝の大信である。

……世間難信の捷徑。……

善し惡しの世間普通の敎えなれば誰にでも信ぜられるが、佛

の廣大なる惠みに出遇ひ、心融けて慶ぶ信心は、中々容易に信じ難いのである。而も八萬四千の法門中往生淨土の道に於ては此の信心の捷徑に如くは無い。則ち世間難信の捷徑である。

……證大涅槃の眞因。……

此の信心は我々が涅槃の證の境界に往かせて貰ふ唯一の眞因である。此の外に我々が往生淨土の道は無い。

……極速圓融の白道。……

此の一念の信心開發の有樣は、手間暇が懸るのでは無い。因緣來れば速に疾く悟らしむてある。氣の附く一念に直に胸中に圓融無碍の淸らかなる白道が開けて下さるのである。此の信心の味ひは何とも外に言うて見樣が無い。實に極速圓融の白道である。

……眞如一實の信海なり。(已上)

眞如一實は涅槃の證の境界である。我々の胸中に一念開發する信心海の中には眞如一實の廣大なる萬德が具足圓滿してある。故に大信心は眞如一實の信海と仰せられたのである。斯の如く十二通りに言葉を換へて信心の廣大なる味ひを讃歎せられてあるのであります。一讀如何にも信心の廣大なる味ひが頂かれるのであります。

偖て此中何れを取つてもお話は出來るのであるが、一番初めの「長生不死の神方」といふお言葉が人生上最も適當と思ひます。故に今日は之を題にしてお話致さうと思ふのであります。

先づ初めに此のお言葉には歷史的に據所がある。夫は申すもなく親鸞聖人が非常に私淑せられた曇鸞大師の入信の事蹟であります。曇鸞大師が初め四論の講說と言つて種々の講說を研究してお出になつた。其中にふと病氣に罹られた。今迄長々研究して來たのであるが、中々容易に此の研究は着きさうにも無い。然るに今病氣に罹つて死ぬやうな事が有つては研究を續ける事が出來ぬ。之には是非長生不死の法を得ねばならぬ。夫には何法が善いかといふので遂に仙術を學ばれる事になつたのであります。仙藥を求め仙術を得て、一方に長生不死の生命を得て、夫から四論の研究を遂げやうとせられたのである。其の爲め大師は梁代の人でありますが、遠く江南に渡りて陶隱居といふ人を訪ねられた。此の人は當時仙術で名高い人であつたと見えるのである。此の人の處へ訪ねられたのであります。私はどうも曇鸞大師の傳に就きては、もつと研究の餘地が有ると考へて居るのである。夫は大師の書物を讀むに、如何にも其の書き方が一通りて無い。今日の所謂大實驗といふやうなものが、どうも曇鸞大師には有りさうに思ふのであります。傳記で見ると其の病氣なるものが氣疾を感じて非常に苦しんだとある。處が色々醫療をやつても何うも面白く無い。之は時代は違ふが今日我々が種々人生上に苦んで神經を惱まし煩悶する、丁度之と同じて有つたらしく思はれるのである。處が傳記の中に不思議な事が書いてある。夫は大師が此病中に汾洲秦陵の故墟に行きて城の東門を入られた處が、靑空の間に三十三天が歷々として顯はれた。之を見るなり心忽然と開けて病頓に癒えたといふ事が明かに書いてあるのであります。之は信仰の經驗ある者には誰でも

解る事で、信仰に入る迄は人は誰でも苦むのである。曇鸞大師にしても四論の講説中、ふと氣欝の病ひに罹り心中一點の光が無くなりて非常に苦まれたのである。處が不思議の經驗によりて病ひは幸に快くなつた。けれども之てはならぬといふので、遠く江南に亘りて陶隱居に仙經を求められたのであります。

すると誰でも言ふ事であるが、其の歸り道に菩提流支三藏に遇はれたのである。大師が三藏に言はるゝには、「全體佛敎に長生不死の法なるものがあるか。自分は陶隱居の許に行き長生不死の法を學びて、斯く澤山仙經を授かつて歸るのであるが、佛敎にも猶ほ之れ以上のものが有るか」と問はれたのである。其の時菩提流支は大に大師を蔑しみて地に唾を吐くとあるから、餘程輕蔑をしたものと見える。して言ふには「何たる哀れな事を言ふか。世間の仙術なるものは設へしばらく長生する事を得ても遂には死を免れぬのである。佛敎にはそんなものは無い。眞の長生不死の神方とは是てある」と言つて、曇鸞大師に渡されたのが從來の說にすれば『觀經』であるといふのである。又『大無量壽經』であるといふ說もある。或は夫れかも知れぬ。兎に角何れにせよ如來の無量壽を說いた經を渡されたのである。して言ふには「是れこそ眞の大仙方てある。此の如來の無量壽を得れば、此世の長生不死の生命を得て四論を研究するなどは以の外てある」と言つてえらく大師をたしなめたといふのである。又或は曇鸞大師が一代喜ばれた『淨土論』を渡されたのてあると言ふ人もある。之ならば猶ほ親しくて可い。兎に角何れにせよ曇鸞大師は其の書を得て、如來の無量壽の生命て永久の證が得らるゝ事を知り、今迄入らざる執着をして、長生きして研究しようなどゝ思つたは以ての外てあつたと、立所に仙經を燒き捨てゝ深く淨土に歸せられたと申す事てある。

聖人は之を『和讃』に宣はく、

本師曇鸞和尙は、　菩提流支のおしへにて、
仙經ながくやきすてゝ　淨土にふかく歸せしめき。

又『正信偈』には

本師曇鸞は梁の天子、
常に鸞の處に向つて菩薩と禮し玉へり。
三藏流支淨敎を授けしかば、
仙經を焚燒して樂邦に歸し玉ひき。

斯くの如く親鸞聖人は曇鸞大師の事を書く時には、屹度此の所を引いてお出になるのである。斯くの如くして曇鸞大師は如來の無量壽の生命一つて仙經永く燒き捨てゝ永久に長らへる不生不滅の廣大なる信仰をお頂きなされたのてある。其の大信心故長生不死の神方てある。夫てあるから長生不死の神方といふ言葉は本來は仙術上の言葉てある。仙術上の言葉なれども眞の長生不死の神方といふは、外に在るのては無い。大信心が即ち是れてあるといふ意味て、曇鸞大師の此のお言葉を『信卷』の劈頭に持つてお出になつたものと、私は頂くのてあります。又次の『和讃』には宣はく、

四論の講說さしおきて、　本願他力をときたまひ、
具縛の凡衆をみちびきて、涅槃のかどにぞいらしめし。

偖て進んて申しますに、親鸞聖人が斯くの如く長生不死の

神方といふ言葉を『信卷』の初に迄持つてお出になつたは、私は決して唯事て無いと思ふのてある。唯曇鸞大師の傳を讀んて深く感じられた丈の事ては無いと思ふのてある。必ず御自身に、夫程迄に强く味はれる丈けの夫丈けの御實驗が有つたに違いないのてある。夫は度々言ふから諸君は既に御察しの事と思ふ。殊に前號の『求道』にも書いて置いたのてありますが、親鸞聖人が九歲御出家なされ、十九歲の時磯長の聖德太子の御廟て六句の夢の告を蒙られた事てある。此の時死の大問題が聖人の上にふりかゝつて來たのてある。聖人が九歲御出家の時に

明日ありとおもふ心のあだ櫻
夜半にあらしの吹かぬものかは

といふ古人の歌を詠まれて、明日迄待つ事は出來ぬ、是非今夜の中に出家せねばならぬと、切ない心のまゝを斯く言はれたといふ事は能く人の言ふ處てある。之が九歲の御幼少の時てある。之は外ては無い、此の歌の如く人生は「明日ありと思ふ心の仇櫻」てある。一刻も猶豫しては居られぬと痛切に人生の無常をお感じなされたのてある。

既に九歲の時聖人は此の感を持つてお出になつたのてある夫が出家をして夫てよくなるのては無い。設へ何れ程姿を變へても人生に此の問題の解決せられぬ中は駄目なのてある。で聖人にして見れば出家の當時も「明日ありと思ふ心の仇櫻」てある。其の翌日も「明日ありと思ふ心の仇櫻」てある。其の翌々日も矢張り「明日ありと思ふ心の仇櫻」てある。斯くして十九歲磯長の御廟て靈告を受けらるゝ迄と雖も一日も安き思ひは無つたのてある。而して其靈告は私今春高田の專修寺に參詣して聖人の御直筆を拜見して參つたのてあります。曰く、

我れ三尊塵沙界を化す。
日域大乘相應地なり。
諦に聽け諦に聽け我れ敎令す。
汝の命根應に十餘歲なるべし。
命終れば速に入る淸淨土。
善信善信眞菩薩。

此の六句何の句に就きても言ひ度い事は澤山てありますが、其中最肝腎なのは「汝の命根應に十餘歲なるべし」の一句てある。今迄も一日の休み無く心配して居られたのてあるが、彌々もう十年と知られた時、聖人の苦みは如何樣てあつたらうか。其處で彌々もう十年と思うて、有らゆる修行戒行を試みられたのてある。此の十年間の聖人の御辛勞は實に想ひやるだに恐れ入るのてあります。而して廿八歲の御時十二月晦日睿南の無動寺大乘院に於て、如意輪觀音より更に第二の靈告に接せられたのてある。

善い哉善い哉汝の願將に滿足せん。
善い哉善い哉我が願亦滿足す。

聖人は十九の時から廿九て死ぬると思ひ詰めて居られたのてある。其處へ又廿八歲の臘月晦日に「善い哉善い哉汝の願將に滿足せん」といふ告命てあるから、彌々以て疑ひ無いと覺悟せられたのてある。就きては何うあつても夫迄に安心せねばならぬといふので、翌年正月から六角堂に參籠せられたので

ある。而して其の歸り道に四條の橋の上で聖覺法印に遇ひ、其の手引きで彌々法然上人にお遇ひなされたのである。『御傳鈔』には茲の所を

建仁第一の曆春のころ、上人廿九歳 隱遁のこゝろざしにひかれて、源空聖人を吉水の禪坊に尋ねまいり給ひき。

とあります。

隱遁の志に引かれてとは如何にも能く當時の聖人の心情を穿つた言葉である。聖人にして見れば學問も今は駄目なのである。世間の名譽も欲しく無いのである。如何なる物も用は無いのである。唯何とも仕方が無くて隱遁の志に引かれて吉水の禪坊にお出なされたのである。今や命終らんとする身を支へて力なく〳〵お出かけなされたのであります。

其時法然上人の御敎化は何うであつたか。即ち選擇本願念佛の外は無つたのである。我々は今にも命終らんとして罪深く惱みの多い者である。其者に向つて如來の大慈は廣大の本願を差し向けて下さるのである。選擇本願とは何うかといふに、如來が其罪深く惱みの多い者に向つて、選びに擇んで南無阿彌陀佛の一法を以て救はにや惜かぬとお誓ひ下されたのである。如何なる十惡五逆の者でも飽迄見捨てぬとある廣大の御本願である。我々か何時死ぬかも知れぬ者、一日も休みなく罪惡深重に苦む者、其者なる事を如來は初めから御存知下されて、其者を救ふとお誓ひ下されたのである。此の廣大の選擇本願の思召をお話なされたのであり升。親鸞聖人は法然上人に遇ひて、初めて此の廣大な御敎化を承はり、其のお慈悲を頂かれた一念に、十年來死ぬる〳〵と思ふて居られたのであるが、思ひ懸け無き大滿足にお遇ひなされたのである。此の大悲大願を頂かれた一念に、即ち「本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり」で、廿年來心配して居られた世間の命は終り、無量壽の永久の生命を獲得なされたのである。今迄命終ると思うて居られたは、即ち此の本願に氣の附く一念であつたのである。斯くの如くして親鸞聖人は法然上人の一言の御敎化の下に即得往生を得られたのである。我々は極樂に生れるといふは、此世の生命の終る時と思うて居るがさうでは無い。本願に氣の附く一念の時である。病が直らうが直るまいが、此世に死なうが生きようが、夫は前生より定まれる業報で、我々の區別すべき處で無い。我々は唯廣大の惠みを頂いて、佛の光明中に攝取せられた一念に無量壽佛の光明中に生れさせて頂くのである。長生不死の神方とは茲であります。眞の長生きとは此の世の肉身の長生きでは無い。永久の生命を頂いて、盡十方無碍光如來に一味にして一切の衆生を利益する時である。此世の十年、五十年、百年の生命は少しも當てにならぬ。朝に道を聞いて夕に死すとも可いのである。不死とは死なぬといふ事である。婆婆より言へば死ぬ時死ぬのであるが、信仰の上より言へば、一念入信の時此世の命は終り、無量壽の生命に入るのである。此一念入信の上からは、此世の生命が終るとも終るまいとも更に差支は無いのである。之を言ひ換へると此世ながらに長生不死の生命を頂くのである。大信心が長生不死の神方であるとは、是であります。之は私の一家言では無い。親鸞聖人の『愚禿鈔』には明に茲の處をお示し下されてあるのであります。曰く、

眞實淨信心は內因なり。攝取不捨は外緣なり。

本願を信受するは前念命終なり。即ち正定聚に入るの文。

即得往生は後念即生なり。即時必定に入るの文。又必定の菩薩と名くるなりの文。

他力金剛心也と知る應し。

便ち彌勒菩薩に同じ。自力の金剛心也と知る應し。大經には次如彌勒と言へりの文。

さて茲になると釋尊が『涅槃經』に說かれてある所も同じであります。釋尊は如何に言はれたかといふに、拔提河の畔りて彌々滅に入り給はんとする時、中夜寂然として聲無してある。此の時阿難が悲みて問ひ奉るには「世尊の滅を示し給ふ事何ぞ一へに疾かなる」と申上げた。すると仰せられるには「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、生滅滅し已れば、寂滅を樂と爲す」である。此の一切世間の法は皆是れ生滅無常の法である。何れは遲かれ早かれ皆壞れるのである。去りながら此の迷ひの執着を離れる時は、此の人生其儘で寂滅の廣大なる樂みの境が開け來るのである。之を「いろは歌」で言ふ時は、諸行は無常なり、是れ生滅の法なり」の二句が、即ち「色は香へど散りぬるを、吾が世誰ぞ常ならむ」である。今皆んなは人生の富貴榮華など〻言つて居るが、我か肉身は斯くの如く滅ぶのである。けれども

如來の色身は滅すと雖も法身は常住にして變易あるとなしてある。今汝等が我に別れるといふて泣くのは我が肉身が亡くなるからであらう。けれども我が肉身は滅びても法身は永久常住にして變易ある事が無い。之をもつと解り易く言ふと法身とは證の境界に於ける佛の體である。今我々が一念の信心を頂いて攝取光中に住む身となれば、設ひ肉身は滅しても、其廣大の證の境界は動ぬのである。何時迄も永久不變にして無量の生命、無量の光を保つのである。今釋尊にして見れば、之より彌々本國に歸りて更に彼土で衆生濟度をして下さるのである。けれども肉身は屹度亡びる時がある。夫は後れ先だつ人はもとの雫末の露よりも茂しと言へりで、實に墓無い。五十年六十年乃至百年にして必ず逝くのである。唯變はらぬは廣大の惠みばかり、是れ一つが有難いのである。夫故「如來は常住にして變易ある事無し」と仰せられたのであります。之を又「いろは歌」で言ふ時は、「有爲の奥山けふ越えて、淺き夢見じ醉ひもせず」とあるが茲である。人生の善き惡しき、苦み惱み、皆此れ夢である。此の夢の奥山今日越えて、淺き夢見じ醉ひもせずである。此の御慈悲に眼の醒めた時に永久不變の親のみ許に歸るのである。長生不死の神方といふ言葉は茲でも頂く事が出來るのであります。

偖て斯くの如くして親鸞聖人が法然上人の下で喜ばれた信心の有樣が、如何にも能く此の一句で頂けるのであります。以上は此の言葉自身に就き、又聖人が頂かれた筋合に就きお話致したのであるが斯く頂いて來ると曇鸞大師の頂かれた信仰も、乃至法然上人親鸞聖人の頂かれた味ひも全く此の長生不死の一句の味ひに外ならぬのである。又お互が喜ぶ歡びも別に異なるべき筈はないのであります。信仰の一段になると我々が喜ぶ歡びも、天親菩薩や曇鸞大師、乃至親鸞聖人がお頂きなされた信心も更に變はる處は無いのである。既に我々同朋の中には此の信心を頂いて無量壽の生命を得、極樂無爲涅槃界に往生してお出になる方々があるのである。暑中休暇

前には西川さんが非常に喜んで往かれ、又先日は菅瀬御夫人がお出でなされたのである。我々も此等の方々の跡を追ひ、此の一念の信心を頂いて彌々長生不死の神方である味ひを充分喜ばせて貰はねばならぬのであります。

中

其處で之より先程申した親鸞聖人が法然上人より頂かれた選擇本願の思召を少し際を立てゝお話申さうと思ひます。抑々彌陀の本願、如來の御呼び聲、大慈大悲、御親心、斯く言ふ以上には、もう言葉が立たゝぬのである。立つなら他力の法門は猶ほ其以上に在るのである。去りながら其の大慈大悲の思召を頂く味ひは何うであるか。前の話に戻りますが、我々人生は當てにならぬものである。我々の肉體、富貴、健康少しも當てにならぬ。我々の居る所は何處であるか、崖の下である。岸の下て三毒の毒を飲み無明の酒に醉ひ、當てにならぬものを當てにして苦んて居るのが我々の有樣である。其の有樣を崖の上の佛の境界より御覽下さる時は哀れて仕方が無い。可哀相で見て居られぬ。早く眼を醒せ、早く醉ひが醒めよと御覽下されてある。けれども崖上崖下離れて居るから仕方無い。勿論我々に自分て其の崖の上に昇る力があるならばよけれども、先程申すが如く墓なき露の命を抱えた我々である。而も墓ない露の命である、「明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」と自分にも思ひ、目にも見ながら第一斯くいふ私自身が其の墓ない世の中を當てにして色々と計畫を立てゝ居るのである。いつ何時が知れぬ世の中である言ひながら色々と計畫に耽りて居るのである。其の無明の我々が此の人生の苦みを越えて崖の上の佛境界に行く事が出來るか。無論行けぬとは言はぬ。夫れは自ら戒を持し座禪を修し、精進勇猛にして聖道の修行の遺り通せる人ならば行ける事が有るかも知れぬのである。去りながら今日人のする修行は善い加減の修行である。面白半分の座禪である。迚も本當の修行や座禪は出來ぬのである。併しながら出來ぬても死ぬ者は死なねばならぬ。さあ斯うなると此の崖の下の我々の境界と、崖の上の廣大なる佛境界と、其間に何か連絡は無いものであらうか。何か如來の御手許に於て特別の思召は無いものであらうかと言ふに、唯今申す佛の本願が外事ては無い。其の崖の上の佛境界より崖の下に苦む我々を直に哀れと思召めして、特別の大悲を以て一條の網を下げて我々に與へて下されたのが如來の本願であります。斯く言ふと甚だ説明風になりますが、崖の上の佛境界の有樣は廣大無邊にして我々凡夫には解らぬのである。唯我々に頂けるのは眼前其の本願の網が居て下さる事である。大慈大悲の思ひ遺る瀬無くて本願の御手を差し延べて下される事である。『和讃』に宣はく、

十方微塵世界の、　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてされば、　阿彌陀となづけたてまつる。

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、
無碍光佛としめしてぞ、　安養界に影現する。

夢、醉ひの醒めた者は、猶ほ醉ひて居る者寢て居る者を見るに見て居られぬ。其の如く大悲の思ひ遺る瀬なくて我々無明の酒に醉ひ伏して居る者、三毒の毒に狂ひ廻はり者、其我々の

目に見えるやう、身に觸るゝやうに廣大の救ひの網を投げかけて下されたのが佛の本願、佛の光明、攝取の心光てある。言葉は色々あるが、要するに此我々を哀れみて助けずには居られぬといふ大慈大悲の外は無いのであります。

さて其の本願とは何てあるか。選擇本願是てある。其の選擇本願とは何てあるか。自から座禪て行ける者は座禪て行くが善いのてある。戒律て行ける者は戒律て行くが善いのてある。自餘の行て行ける者は自餘の行て行くが善いのてある。夫等の行て行けるなら佛は骨折つて助けようとは仰せられぬのてある。佛が助けると呼んて下さるのは何故てあるか。夫等の道の絶え果てた我々てあるからてある。佛は願を起して座禪で助けるのては無いと言つて下された。何故かと言ふに座禪は自分で崖の上へ攀ぢ上る仕事てある。夫が出來る位なら佛は初めから願を起しはなさらぬのてある。又戒行て助けるのては無いと言つて下された。何故てあるか。戒行も自分て崖へ攀ぢ上る仕事てある。そんな事が出來る位なら初めから苦んて願を起す事も無いのてある。其の何一つ出來ぬ我々ぢやによつて佛は此者を哀れみて、向ふより南無阿彌陀佛と名乘りを揚げて、其の大慈大悲の親心一つを以て我々を助けんとお呼び懸け下されたのてある。是が選擇本願てあります。之を『歎異鈔』て申すなら、

親鸞におきてはただ念佛して彌陀に助けられまいらすべしとよき人のおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。

とある。茲が有難いのてあります。

此の間も申した事てあるが、私が此の夏中諸方を傳道して廻はりて居る中に、自分が氣就かずして申譯無い事を仕たと思ふ事が二つある。私は此の二つに大に此夏は氣附かせて貰ふたのてあります。夫は『歎異鈔』第三章の

善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。云々。

の章てある。私は平素堂々と『歎異鈔』て此の章を拜讀して、善人の爲めの本願ては無い、惡人の爲めの本願てあると人にも言つて居つたのてある。夫故頂く自分に於ても我が如き惡人を助け給ふ本願てあるか、此の私一人の爲め大願てあるかと喜ばせて頂いて居たのてある。然るを世間てはあんな人さへ助かるに、況して此の樣な人が極樂へ往かいては往く者が無いなどゝ言ふ。夫ては本願て助かるのては無い、善いから助かるのてある。夫ては本願他力の意趣に背くものてある。善い者を助けるが惡人でも助けるとの本願ては無い。惡人故其者を助けるとの御本願てある。崖の上から綱を下して彌々助けるといふ一段に於ては、今沈むといふ者程彌々急にせねばならぬ。「善人猶以て往生を遂ぐ、況んや惡人をや」てある。今死なんとする者こそ第一番に救はる可きてある。自分て少々ても善い事が出來る者は、夫れ丈け人間が善いのてある。今死なんとして居る者、今苦海に溺れんとして居る者、其者にこそ第一番にお慈悲の網は下るのてあると、此事を常に私は人にも説いて居たのてあります。而も私自身が此の夏大に氣の附かなんだ事がある。夫は恁ういふ事てあります。

若し茲に或功勞が有つて、國家が之に恩賞を施すといふ場合にには、夫は無論善人の方が先きである。處が一朝國に災害が有つて飢饉或は地震といふ樣な際に、天皇が特に國家の庫を開いて窮民を賑はされるといふ場合は何うであるか。家に餘財が有つて立派に其の間にやつて行ける者は先づ後廻はしである。誰れよりも先きに先づ貧乏の者へ、困窮の甚しき者へと下さるのである。斯くの如く同じ事であるが方角によりて大なる相違を生ずるのであります。其の如く自分で證の境界に行くといふ日には、夫れは無論善人の方が先きである。去りながら向ふより情けを下されるといふ場合には先づ誰よりも先きに哀れの者をとお救ひ下さるのである。是が佛の大慈大悲の御惠みであります。處が此の夏私が大に氣が附いたといふは、御存知の如く私の國は今夏非常なる大震災でありました。其の爲め多くの人間が非常なる若勞をした事であります。すると私共有縁の善知識を初め、見舞ひの人々がお出で下された。其際私が何う考へたかといふに、こんな時には何うして接待申上げたら善いものであらうか、いや村の者は皆袴を着けて迎ひに出まとか、何とか彼とか、種々に氣を揉んだものである。そうして直々御叮嚀なる御詞を承はるが早いが、私は何うかして何かお見舞ひの品物を差上げ度いと、種々に考へたけれども、何分そんな餘裕が無い。仕方が無いから兎に角出來る丈けの誠意を致す事にしたのであります。そう仕て居るものゝ何と無く氣が落ち着かぬ、自分ながら甚だ落ち着かぬ氣持である。すると其後が朝庭よりは特に態々北條待從を遣はされて此の哀れの窮民をお見舞ひ下さる事になつた。すると北條待從がお出で下されて、彼處の破れ家、茲の茅屋とお見舞ひ下さる。私は其の如何にも御叮嚀なるに驚き入つたのである。地方の行政官でも其處迄は手が屆き兼ねて居るのに、陛下よりの御使ひは、彼處の破れ家、茲の茅屋、如何なる汚い荒小屋迄も窮民といふ窮民は必ず御見舞下さる。私は實に有難いと思ひまして、ふと氣が附くと、此の樣な際に我々田舍の罹災民が、いや御接待である、いや献上物であると、そんな事に氣を取られ居て、肝腎の御見舞ひの思召を頂かないては實に相濟まぬ譯である。斯く氣が附いて考へて見ると、私は平日言つて居る處と丸で實際の場合になつて正反對の考へ方を仕て居たものである。國に地震が有つて多くの家が倒れ、澤山の人間が死んだ。夫を可哀相であると、其の慘狀を御存知下されて態々　陛下より御見舞の人を賜はり、足を運んで下されたのである。夫にいや御接待である、いや禮服着用てお迎へせねばならぬ、いや献上物であるの何のと、そんな事處では無い。斯の如き酷い處へ、態々貴き處より人を下し給はつて御見舞ひ下さるのである。夫を承ると何とも申上ぐべき言葉も無い。唯難有き廣大の思召であると頂く計りである。苦しい中から無理して接待や献上物をする樣では却て思召に叶はぬのである。唯斯の如き者を哀れんで此者を目當てにお遣し下された御使ひであるかと、感佩感泣して其廣大の思召を頂く、之が何より肝腎であると　氣附かせて貰うたのであり升。平日御巡幸の時ならば、或は地方の善き者から出かけねばならぬかも知れぬ。併しなから此の際には不幸な者、死んだ者、

家の倒れた者から先てある。其者をお目當ての御使ひてあると喜ばせて貰うたのであります。今の『歎異鈔』の御文て申せば、即ち「善人なを以て往生を遂ぐ、況んや惡人をや」である。慘害の少い者さへ見舞つて下さるのである。況や慘害の甚しき者に於てをやである。以上は私の今夏人生上に感じた處を如來のお慈悲に並べて申たのである。

抑々本覺明了の境界より廣大の本願を起て、十方衆生と呼び懸けて下されたは誰れの爲てあるか。何者の爲に佛は五劫兆載永劫の御苦勞をして下されたのであるか。我々田舍の百姓の分際では宮内者の内輪の樣子は解からぬのである。解らぬけれども唯可哀想てあるとの廣大の思召から、現に見舞ひのお使者がお出で下されてあるのである。我々凡夫の淺間しき考では、佛陀の廣大なる境界は測り知る事が出來ぬ。けれども五劫兆載永劫の御苦勞は、我々一人々々が爲めてあるとお知らせ下されてあるのである。聖人は宣はく、

彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためにて候ひけり。されば、そこばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼし召し立ちける本願の忝けなさよ。

と。其の五劫が何程てあるか、其の一劫がどれ程であるか。夫は我々には解からぬのである。解らぬけれども茲に無量無邊の廣大の思召から、其の罪惡の者を哀れみ給ひて廣大なる本願を御成就下されてあるのである。『歎異鈔』には又宣はく

そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なさがゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なさがゆへに。

云云。

私は平素惡人の爲めの御本願である、貧乏人の爲のお惠みであると言うて居なから、いざ自分が之を受けるといふ場合になつては、はや何時の間にか、自分が善人になり變はつて居たのである。田舍者がそんな場合に禮服を着けて迎へ方に氣を附けねばならぬなどゝ、頂く方は頂きながらも其の頂きようか大變改まつて居たのである。如來のお慈悲はそんな事では無い、そんな禮服着用で頂くお慈悲では無いのである。北條侍從は　陛下の大慈大悲の御聖意が我々貧困者に頂けるようにお出で下された御使者である。『御文』には宣はく、

善智識といふは阿彌陀佛に歸命せよといへるつかひなり。

又『歎異鈔』には、

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。

と。又『和讃』に曰く

善知識にあふことも、　おしふることもまたかたし、
よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたし。

法然上人は親鸞聖人の爲には善知識である。其の善き人に何をお頂きなされたか。たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべ

しと、此の御一言を承はりて、「はい」とお頂きなされたばかりである。又『御文』には宣はく

その名號をきくといへるは、南無阿彌陀佛の六字の名號を無名無實にきくにあらず。善知識にあひてそのおしへをうけて、この南無阿彌陀佛の名號を、南無とたのめばかならず阿彌陀佛のたすけたまふといふ道理なり、これを經に信心歡喜ととかれたり。云云。

何を聞くか。其の哀れの者を旨と哀れんで下さるお慈悲であると聞く丈けである。此の外に何も聞く事は無い。其の罪業深重の者を哀れと御覽下さる時は、御自身は九重の雲深き處にお出なされても、ぢつと安心して居る譯には行かぬ。十方衆生若不生者不取正覺と誓はさせられて、其雲深き所より南無阿彌陀佛と姿を御顯し下されたのである。其の廣大の南無阿彌陀佛と頂く時は、「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、善き人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」で、唯佛智の不思議と頂くばかりである。誓願の不思議、名號の不思議、佛智の御不思議と頂く外は無いのである。我々には其の九重の境界は解らぬと投げ遣りに信ずるのでは無い。唯々、何事も佛智の御不思議であると頂くのであります。

蓮如上人は六字の名號が火に燒けて、六體の佛に御なり候が不思議であると或人が申された時、夫は更に不思議でも無い。我々此の罪深き惡人が、お慈悲を頂く一つで佛に成るのが不思議であると申された。我々此の罪深き惡人に、其の廣大の惠みを差向け給ひて、態々大慈大悲の御使者をお遣はし下された。其の廣大の御聖意に氣が附くと、心も言葉も絶え果てゝ何とも言うて見樣が無い。唯南無阿彌陀佛々々々と頂く外は無いのである。是が不思議と頂いた心持であります。

茲になると何等の理由も理屈も無い。設ひ法然上人の仰せられた事がうそでも、欺されたのでも構はぬのである。設ひ其の綱が切れた處が、もと〳〵我等は望みの絶え果てた崖の下の衆生である。本來地獄は一定住み家の身の上である。設ひ法然上人にすかされ參らせて、地獄に墮ちたりとも更に後悔は無いのであります。然るに其の罪惡の者を哀れみて捨てさせ給はぬお慈悲と承はるのである。此の仕樣の無い者の上へ一條の綱が投げさせられてあると承はるのである。之が信ずるなとあつても信ぜずに居られやうか。『執持鈔』には宣はく、

故聖人(源空聖人)のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり。(中略)たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて往生淨土の業因ぞと聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず。そのゆゑは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかばひとりゆくべからず、師といもにおつべし。さればたゞ地獄なりといふとも故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなり。

云云。

「源空があらん所へ往かんと思はるべし」とは、「まあ俺の往く處へ來ると思へよ」と仰せられたのである。茲に至りては最早人間の言葉では無い。之が普通世間で言ふ如き、欺す欺さぬとか、違ふ違はぬとか、そんな薄弱な事なら斯うは仰せられぬのである。「俺れは此通り既に實驗してちやんと安心して居るのである。まあ俺れの往く處へ往くと思うて居れ」と仰せられたのである。實に一點私の無いお言葉であります、であるから親鸞聖人が、其の御一言の御敎化の下に、「たとひ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへ參るべしと思ふなり。たとひ(中略)すかされ參らせて地獄に墮つといふとも、更に口惜む思ひあるべからず」とお頂きなさる事が出來たのである。親鸞聖人が法然上人の御敎化をお喜びなされた味ひも有難いが、法然上人の御敎化夫自身も又實に有難いのであります。「源空であらん所へ往かんと思はるべし」――『阿彌陀經』の中には、

我是の利を見るが故に此の言を說く。

とあつて、「今法然は此の明かな利益を自分自身に頂いて、居る故に此の通り言ふのだ」と仰せられたのである。而して此のお言葉其儘を頂いて、外に道が有るのでは無い、何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定棲み家の身である。唯此の廣大のお慈悲一つが有難いとお頂きなされたが親鸞聖人の信仰であります。

已上は此の夏私の國の地震に際して、平素自分で口にしなから氣の附かなんだ事に氣附かせて貰ひ、今更の如く天朝の宏恩を思はせて貰ふと同時に、大慈大悲の御恩を喜ばせて貰うた次第を申したのであります。

下

話が長くなりますが、私が此の夏氣附かせて貰うた事が、も一つある。夫は私が如來の選擇本願をお話するに就いて何時も親が手織りの着物を下さる喩えを申して居たのであります。之は何うかといふに、南無阿彌陀佛の六字は佛の下された手織の着物である。今風の流行の絹の着物や、上はべばかりの派手な衣服は我々亂暴息子には何の役にも立たぬ。戒行や塵彈の着物を着ても我々は直ぐ破りて仕舞ふのである。其外如何なる着物も我々には着られぬのである。着られる着物は一枚も無い。其處で其者を哀れみ給ひて、其の着られぬ奴めに着せ度いと、親が艱難辛苦して仕立て上げて下された一枚の手織りの着物が南無阿彌陀佛の六字である。之が何時も言ふ私の譬喩であります。處が其際何時も私の申して居つたには、其の手織の着物を頂いて居ながら、唯頂いた〳〵と言つて居るのみで、眞實頂いて居らぬならば何にもならぬのである。嘗つて親が私に一枚の手織の着物を下された事がある。夫にも係はらず私は其の着物を着なかつた。其の爲め親が非常に悲まれた事がある。我々が如來の本願を頂いて念佛を稱へるにしても、稱へる稱へぬはさて措いて先づ其の之れを下さる廣大の親心の程を頂かせて貰はねばならぬのである。有難いといふは何處が有難いのであるか。何の着物も着られぬ者に、着られる一枚の着物を仕立てゝ下された親心が有難い

のである。外の着物も着られると思うて居る間は、此の眞實の親心は頂けぬのである。そんな考で居る間は、設へ念佛を稱へながらも座禪戒行も仕て見度いような氣になるのである。そうなると念佛を稱へて居るにしてからが、稱へねばならぬ〳〵と力みて稱へる念佛になる。夫では眞に唯念佛といふ味ひは頂けぬのである。外の行が出來る位なら佛は念佛を仕立て上げて下さらぬ。我々は何れの着物も着る事の出來ぬ身の上である。其者なればこそ佛は此者を助ける爲めに、南無阿彌陀佛の一枚の着物を仕立て上げて下されたのである。此の念佛を下されたが外では無い。我々は自余の行では行けぬ者、何れの行も及び難き身なれば地獄は一定棲み家の身の上であるからである。茲を能く頂かねばならぬのであると、茲迄は今迄も常に申して居つたのでありますが、之が又大事の頂き所であります。諸行往生を許すと許さぬとは茲に在るのである。全體諸行往生を許すも許さぬも無い、我々は自余の行では往く事で出來ぬのである。出來る位ならば、佛は骨折つて南無阿彌陀佛を作り上げて下さる事は無いのである。選擇本願とは外では無い、我々が自余の一切の行では往く事の出來ぬ身の上なる事を御承知下されて、南無阿彌陀佛の一法を選びに擇んで下されたのが選擇本願である。其の選んで下されたは佛が我々の未始終を見極はめて、佛の方から擇び上げて下されたのである。茲は大事の所故今少し叮嚀に申しませう。

全體何れの行も及び難き身なればと言ふのも、我々自分で解つたのでは無い。親の方からちやんと其處を見極はめて敎えて下されたから解つたのである。毎度言ふ譬へでありますが、我々が醫者へ行きて、病氣を見て貰ふ。初めの中は自分にも夫程の病人と思うて居らぬ。直ぐ全快し得るものゝ如く思うて居る。すると醫者の言ふには「之はうつかりして居られぬ。あぶない病氣である。迚も助かる見込の無い病氣である。が茲に一服の藥がある。之ならば助かる。外の藥では助からぬ」とて、一服の藥を渡された。之であります。此の一服の藥は誰にでも飲めと渡された藥では無い。何うしても助からぬ者に飲めと下された藥である。でなければ南無阿彌陀佛の有難い譯は解らぬのであります。して其の一服の藥を渡されるなり、「あゝ其の如き罪惡深重煩惱熾盛の重病人であつたか。此の奴を助けんが爲めに、佛陀の親は五刼兆載永刼の御苦勞下されて、此の一服の藥を御用意下されてあつたのか。今迄之を知らなんだとは實に勿體無い。如何にも此の一服でなくては仕樣の無い重病人であつた」と、始めて其一服の一通りで無い事が解らせて貰へるのである。して其藥の有難い事が解つた時には、其の藥で助からうも助かるまいも無い。何れの藥も及び難き極惡深重の重病人であつたのである。唯此の如き重病人を哀はれみまして一服の藥を御用意下された本願の忝けなさよと頂くばかりである。之を着物の例で申すなら、如何なる着物も汚して仕舞ふ我々である。然るに其者に着せようとて御成就下されたお慈悲の塊りの手織りの着物にて在しますと頂く外は無いのであります。

さて之迄は私が從來に氣か附いて居た處である。之は要するに横着に頂いてはならぬと言ふ事を申したのであります。夫は私か嘗て着なんた事があるからでありますか、茲に一言

申して置きたいのは、夫を着たからとて決して自分が善くなるのでは無いといふ事である。昔の私にすれば或は人は流行を追うて派手にして居るが、自分は親のこさえて下された手織を着て居ると、殊勝づらを仕て居つたかも知れぬのである。去りなから今になると人目の爲めの念佛ではない。設ひ人が賞めて呉れたにした處が少しも嬉しくは無いのである。唯自分に於ては廣大の勅命に從ひて南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へるより外に仕て見樣が無いのである。『和讃』に曰く、

彌陀大悲の誓願を、　ふかく信ぜんひとはみな、
ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべし。

明け暮れ念佛を稱へるは、自分で善き事を仕度いが爲では無い。廣大のお慈悲が解つて見ると、稱へるなとあつても稱へずには居られぬのである。

茲に至りて初めて申しますが、此の夏親が來られて私に一枚の手織の着物を下されたのである。で私は何んでも此の夏は大に着ようと考へて、恰も寶物でも持つた氣になつて大事にして傳道に出かけたのである。すると段々暑くなるに從つて、汗が出てくちや〳〵になり相である。其處で私の考へますには、之は餘りひどくならぬ中に持つて歸つて染み拔きでもしてから又着やうと考へて、大事にして持つて歸つたのである、茲で私の氣の附かなんだのが情けないのであります。すると母親が言はれるには、こんなものは染み拔きも何もあるものでは無いと、直ぐ水に入れて糊着けのバン〳〵にして下されました。すると又元の立派な着物になつたのである。私は之を見て熟々と感じたのであります。其處で又之を頂いて四國の方へ出かけたのである。すると四國で丸尾と申す方が言はるゝには熟々自分の心を案ずるに親にも兄弟にも言へぬ惡い心である。こんな心で念佛してもいかぬと申された。其處で私は「其の心を佛は御存知無いのか」と申した。すると「いや實に申譯が無い」と言はれる。「いや申譯が無いでは無い。佛は兼ねて其の心を御存知下されて、其者が可哀相だと言つて下さるのである。其の者を憎み厭ふと仰せられるのでは無い、其者が不愍に堪えぬと言つてゝ下さるのである。『歎異鈔』には如何にあるかといふに、

佛かねてしろし召して願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば、

とあるのである。貴方は今漸く氣が附いたと言はれるが、佛はかねて知し召してと言つてゝ下さるのである。貴方の氣の附く前に、佛の方が先き知り拔いて居ると言つてゝ下さるのである。此のかねて知し召してとある一言が有難いでは無いか。選擇本願は此のかねて知し召してといふ一言で盡きるのである。南無阿彌陀佛は佛がかねて我々が外の行ではいかぬ事を見拔いて下されて御廻向下されたのである。五刼思惟の御苦勞は我々罪惡深重煩惱熾盛の衆生である事をかねて知し召し下されたからである。貴方は今自分の心が申譯が無いと言はれるが、夫を御存知無い位なら、此の御苦勞は下さらぬのである。親の方では我々子供が汗をかく、汗をかく事を初めから御存知故汗をかいても差支ない着物をこさえて下されたのである」と話しつゝ、ふと氣が附くと、自分は此間汚してはならぬ〳〵と親の手織の着物を疊んで家に持つて歸つた

のでは無いか。親の方では私が初めから汗かきである。汗をかく事をよく御存知下された故汗をかいても洗へは直ぐよくなる着物を御與へ下されてあつたのである。夫を知らないで疊んで持つて歸つたとは實に勿體ないと何時の間にか自分の事になつて、深く氣附かせて貰ふたのてあります。南無阿彌陀佛の六字が金剛の信てあるとは實に玆の味ひをお示し下されたのである。

三毒の煩惱はしば〳〵起れどもまことの信心は彼等にもさへられず、顚倒の妄念は常に絶えざれども、更に未來の惡生を招かず。

我々は南無阿彌陀佛々々々と喜んだ後から直ぐ腹立てゝよごして仕舞ふのてある。けれども夫を承知で御成就下された念佛故、直ぐ其後から又南無阿彌陀佛々々々と喜ばせて下さるのてある。斯くして喜んだりよごしたり、よごしたり喜んだりして、末來佛果迄御引連れ下さるのてある。夫を私のやうに一度頂いたからにはよごしてはならぬと取り違へると、自分て力みて念佛を稱へる氣になるのてある。「彌陀大悲の誓願を、深く信ぜん人はみな、寢ても醒めてもへだてなく、南無阿彌陀佛々稱ふべし」――寢ても醒めても唯一枚の南無阿彌陀佛てある。よごす後から直ぐよくして下さる南無阿彌陀佛てあると氣附かせて貰ふたのてあります。

勿論之とて今迄に申さぬ事ては無い。が申しながらも此度自分が實際の場合に當りて初めて氣附かせて貰うたのてあります。此の着物はよごしてはならぬ着物てあると思ふと、自分て自分の身體を迫めなくてはならぬようになる。夫では折角頂きながらも却て心配の種てある。親は此方の性分をよく御存知て、其よごす者ぢやによつて、水て洗へは直ぐおちる着物を御用意下されてあつたのてある。『歎異鈔』には宣はく、

まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともよしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり。そのゆゑは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほゝたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめ。……

我々は自分の物差ばかりて居るから可かぬ。自分物差ては佛の廣大なお慈悲は解らぬのてある。我々は自分の如き惡人てはと言つて居る。けれども佛は其惡人ぢやによつて此の手織りを用意して置いたのだと言つてゝ下さるのてある。我々は善きも惡しきも自分て心配する事は無い。佛が惡いと仰せられる迄は安心して其の着物を着て居ればよいのてある。

……煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそおぼせはさふらひしか。

此の世て如何に綺麗、立派にするも皆そらごと、たわごとてある。眞實我々の行ける道とては一も無い。其の行けぬ者ぢやによつて之を哀れみて御成就下された南無阿彌陀佛てある。人生眞のまことと言へば此の念佛のあるばかり、此のまこと一つが有難いのてある。而して此のまことに氣が附いた一念が即ち本願を信じた一念てある。其の一念に前念命終後

念即生、我々の心中に初めて長生不死の生命を頂くのてある。

『執持鈔』て頂くと、

根據つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとてうたがふべからず、徑に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となつくることは、佛の不思議力をたもては往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも往生なほ不定ならば正定業とはなつくべからず。我すてに本願の名號を持念す、往生の業すてに成辨することをよろこぶべし。かるがゆへに臨終にふたゝび名號をとなへずとも、往生をとくべきこと勿論なり。一切衆生のありさま過去の業因まち〳〵なり。また死の緣無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つるぎにあたりて死するものもあり。水にをぼれて死するものもあり。火に燒て死するものあり。乃至寢死するものもあり。酒狂して死するたくひあり。これみな先生の業因なり。さらにのがるべきにあらず。……

現に私の故郷の如き、地震によりて死する者もある。又先日の如き下宿が燒けて死ぬる者もある。人生の有樣實に此の通りてある。是れ皆先生より定まれる業因てある。脫れる事は出來ぬのてある。

……かくの如きの死期にいたりて一旦の妄念をおこさんほかは、いかてか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。……

さあ彌々燒けて火の下になつたといふ場合、我々凡夫の習ひ悲み殘念の妄念の外に、名號稱念の思ひなど起り得よう筈が無い。念佛稱へて居る暇も無いのてある。

……平生のとき期するところの約束もしたがはゞ、往生のぞみむなしかるべし……

されば平生の時安心決定せずば、我々凡夫は往生淨土の見込は無いのてある。

……しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまるものなり……

しかれば我々往生の得否は、平生の信の一念に於て決まるのてある。

……平生の時不定のおもひに往せばかなふべからず。……平生不定の者なら、永劫往生淨土の望みは無い。

……平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念發得せば、そのときをもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし。

言ひ度い所は玆てあります。殊に此度び如き地震に出遇つて、無常の激しき有樣を見聞すると、一入玆の所を痛切に味はせて貰ふのてある。親鸞聖人は廿九歳御入信の一念に前念命終後念即生と仰せられた。我々も信の一念に此世の生命は畢りて、次の一念には直ぐ此世ながらに佛の無量壽の中に生れさせて貰ひ、長生不死の生命を頂くのてある。其有樣は恰も暗去り日出づるが如くてある。而して此の肉體の終るなり、直に眞實報土に往生させて頂く。此世を終れば終るて直ぐ法性の月影が見ゆるのてある。月影の見ゆるは日の沒するからてある。日中法を喜ばせて貰うて居れば、日の暮るゝと共に月影が見えるのてある。我々平生法を喜ばせて貰ひ、善知識の

教えの下に歸命の一念を發得せば、其時を以て娑婆の畢り、臨終と心得べしである。其の歸命の一言を釋して直ぐ次ぎに又、

そも〳〵南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなれば、またこれ發願なり。このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義なり。此の能歸の心、所歸の佛智に相應するとき彼の佛の因位の萬行果地の萬德、こと〴〵く名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。

其の廣大の如來の念佛を一念有難いと頂く刹那に、我が心如來の心と一味に仕て下さるのである。又次ぎに、

殺生罪をつくるとき地獄の定業をむすべば、臨終にかさねてつくらざれとも平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくの如し。本願を信じ名號をとなふれば、その時分にあたりてかならず往生はさだまるなりとしるべし。

此の廣大の惠みの中に生かせて貰ふのが長生不死の神方であります。而して一度此の境に至れば、後に殘りて苦む者を導かずには居られぬ。是れが還相廻向の御手引きであります。

《已　上》

聖傳

デヤータカ釋尊傳

第三十三　賢こき鳥と馬鹿者の話

世尊ジエタバナに於て己が小屋より燒け出されし僧に對して或譚を說きたまへり。

物語に曰く、一人の僧ありき。一日其師より考案を受けぬ是を思念せんが爲に、ジエタバナを去り、コサラの民に屬せる村に近き森へと隱家を求めたりき。

然るに其初月彼僧の小屋は燒失しぬ。僧は人々に「我家は燒けたれば、いと不快に暮せり」、とつぶやきぬ。されど人々は「我野はすべて干せぬ、いざ土地を濕さん」と嘯きぬ。かくて野の泥田となりし時いや種蒔にかゝらん」と云ひぬ。種蒔の終りし時「我等は垣を作らざるべからず」と辯解したり。垣の出來し時「我等は刈り入れて賣るべく用意せざるべからず」、と云ひて三ヶ月は空しく過ぎぬ、

僧は三ヶ月屋外に生活し禪定を終りしもいまだ光に接する能はざりき。斯くて彼は師に歸りて彼を禮し恭しく一方に座を取りぬ。

師は彼を喜び迎へたまひ、問ひ給へる樣、「兄弟よ、汝は我の與へし暇を愉快に過しゝか、汝は禪定を全ふせりや」と。

彼は師にありし事共告げ奉り、「我はふさはしき家を得ざりしかば、禪定を全ふする能はざりき」と云ひぬ。

師は「嘗て獸さへも彼等の爲に適當なる事を氣附けられ、又或者は是を知らざりき」とて次の譚を說きたまへり。

昔ブラマダツタベナレスを統べし時、菩薩は鳥の生をうけたまひき。彼は鳥の群と共に四方に枝の繁りあふ大樹の傍の森の生活をなしたまひぬ。

一日大風吹きすさみ、其大樹の枝を動かして互に摩擦し始めしが遂に煙はのぼりそめぬ。菩薩これを見ておもへらく、「若し此等の二枝かくの如く摩擦して程へば、必らず火を發するに至るべし。火は下りて下の枯葉に移りなば大樹は忽ちに消滅せん、われらは此處に止まる能はず、我等は何處か逃れざるべからず」とて仲間に次の歌もて告げぬ。

み空の子等がたよりたる
大樹は今や火とならん。
空をたづねて、ゆけ鳥よ、
まことの家もかくれがも
危險を出す心せよ、

怜悧なる鳥等は菩薩の聲を聞き直ちに菩薩と共に他所へ逃れ行きぬ。されど愚かなる鳥は互に曰く、「彼は常に水の一滴の中にも鰐魚を見る」、とて菩薩の云ひし事に注意せずして彼處に止まりぬ。

程なく火は菩薩の云ひけん如く燃え出て樹木に移りぬ。煙と炎は空高くのぼり、鳥は烟に目じひのがるゝに由なく漸々に火中に落ちて死しぬ。

師は此說敎を終りし時曰はく、「樹上に巢くふ鳥さへも何れの處がおのれに適するや否やを知れり、汝これを知らざりしは何たる事ぞや」とて眞諦を說きたまへり。此終りに於て僧は信を得たり。師は因緣を說きて宣く、「菩薩の聲に聽きし鳥は佛陀の從者なり、賢こき鳥とは我身なり」と。

第二十四　鶉と猿と象との話

「長者を敬ふ人々は」――こは世尊サヴアッチに向ふ道すがらサリプツタに對し屋外に臥せし事につきて說きたまへり。

アナータピンジカ彼の僧院を辭し、師に言傳してラージャガハを出てヴエサリに達しぬ、暫時休らひし後再びサーヴアツチへと出て立ちぬ。

此時六の弟子等は先へ行き。長老等の爲に宿所を占めらるゝ前にあらゆる限りの宿を占めぬ。曰く「是は我等の世尊の爲に、これは我等の敎師の爲に、これらはわれらの爲に」と。

後より來りし長老等は眠るべき家を見出さず、サリプツタの弟子等さへたゞ徒らに長老等の爲に宿を求めぬ。長老等は詮方なくて或は終夜、あなた、こなた消遙し、或は師に近き樹の根に座して夜明をまちぬ。

曉師は起き出てたまひ咳したまへり。長老亦咳したり。

「其處に在るは誰ぞや」、と世尊は問ひたまひぬ。

「そは我サリプツタなり」と答へ奉りぬ。

「汝は此處に何を爲すや、いまだ早きに、サリプツタよ」と師は問はれたり。

時にサリプツタはありのまゝに告げ奉れり。長老の曰へる

を聞きて師は思へらく

「我在世に於てすら僧等が如此く相互に禮讓も恭敬の念もなしとせば、我滅後は如何ならん」、とて法の行末を深く案じたまへり。

彼は日出づるや直ちに大衆を呼びあつめ、問ひて曰はく、

「僧等よ、我先に云ひけん如く、六の弟子等先に出立せしに長老等を顧みず、おのれらの爲にのみ、宿を占めしは眞なりや」

「そは眞なり、世尊よ」と彼等は云ひぬ。

師は六弟子を咎めて、僧等に向ひ、敎戒をたれたまひぬ。

「僧等よ最上の座と最良の水と最良の米を受くる人は誰なりや」

或者は「貴人の僧となりしもの」といひ、或者は「波羅門なる家長の僧となりしもの」と答へ、或は「法によく精通したるもの、法の顯明なる人」と云ひ、「第一、第二、第三、第四の果を得たる人或は信ある人」と答へ、又「涅槃或は阿羅漢果の第一、第二、第三、第四に達したるもの」、或は「三眞諦を知れる人」、或は「六倍の智慧を持つ人」等とさまく〳〵に答へぬ。如此僧等は最上の座等を受くべき者と思惟したる人々を擧げし後、師は宣く

「我宗敎に於ては貴人、僧侶、或は富貴に關せず、法に精しきを問はず、聖經の諸法に通ずるによらず、果によらず、涅槃の遠近にかゝはらず、此等は皆最上の座等の標準に過ぎず、されど我敎に於ては、僧等よ敬虔、奉仕、尊敬、禮儀等は年齡によりて拂はるべきものとす。老人は最上の座、最良の水、最良の米を受くべきなり。こは正しき標準なり。されば年長の僧は此れ等を受くべきなり。而して今サリプッタは最長の年者なり。彼は我第一の弟子にして法の第二の基礎なり。されば宿所は我に次ぎて受くべき權利あり。然るに彼は宿るべき軒なくして樹の根に夜を明かしぬ。若し汝等今に於て彼を敬せずば後來に於て如何なるや。」

なほ一歩進みて師は曰はく、「昔獸さへも云ひぬ「互に敬はず禮儀なく適當なる交を結ばざるは惡し、我等は誰が最も年長なるかを見出して彼を敬すべし」とて懇に事を運びて遂に長者を見出し、尊敬を拂へり。されば彼等死せし後神の國に生れしと云ふ」とて次の譚を說きたまひぬ。

今は昔、ヒマラヤ山脈の中に於て大なる菩提樹近く三つの友ありき。即ち鶉と猿と象となりき。彼等は互に尊敬せず、睦まじき交を結ばざりき。

されど彼等ふと心附きて、「斯る有樣に交るは正しからず、我等のうち最も年老へる者を誰も敬はんは如何に」といひぬ。

次に「誰が年長なるや」との問起りぬ。こはそを見出す事宜敷からんと彼等は一日考へたり。かくて彼等菩提樹の根に共に座せし時猿と鶉は象に向ひ、「やよ象よ、汝が初めて知りし時此菩提樹は高さ如何程なりしや」と問ひぬ。

「友よ我幼なき時常に此樹の周圍を歩みぬ。其時には我足の間にてもつほどの小木なりき。我足の間に挾む時は恰かも我臍にまで達しぬ。されば我は此木が小なる木の頃より知るなり」と云へり。

次に彼等は同じく猿に問へり。彼答へて曰く「友よ、我小なりし時地に座して此樹の頂の芽を喰みし覺えあり。其時は單に我頸を延せば事足りぬ。されば我は最も早くよりこれを知りぬ」と。

時に二疋は又前の如く鶉に問ひぬ、「友よ我はかく〳〵の所に大なる菩提樹ありしを知る其實は我喰ひ、種は此處に落しぬ。其種より此菩提樹は生ひ立ちぬ。されば我は此木の生るゝ前より知れり。故に汝等よりなほ年長なり」。と鶉は云ひぬ。

此時象と猿は怜悧なる鶉に云ひぬ。「汝は我等のうち最も老年なり、以後我等は汝に奉仕すべし。かつ汝に尊敬を拂ひ、汝の前に禮すべし。而して汝をあらゆる恭敬と禮讓を以て遇し汝の言を用ゆべし。汝は我等が請に應じ如何なる相談も敎訓を辭せざるや」と。

以後鶉は彼等に敎をたれ、彼等の義務を覺らしめ、おのれ亦是を守りぬ。かくて此三者はいよ〳〵五戒を持し、禮を以て交はりしかば遂に天上に生ずる果報を得たりと云ふ。

此等三者は「鶉の聖者」として知られぬ。こは唯、彼等が禮と敬を互に盡しゝによれり。然るに汝等は宗敎によりてよく敎へられ乍ら、互に禮讓なく敬愛なきは何ぞや。以後、汝等に長者を敬ひ禮すべく命ず、最上の座、最上の水、最良の米、まづ長者に供すべし。長老は決して巡回中屋外に臥すべからず、長者をかくの如く虐待するものは犯罪と、す」とかくの如く大衆を戒めて偈を宣へり。

長老敬ふ其人は
信をば獲たる人ぞかし、
一生ほむるねうちあり
來生もまた幸あらん。

とて因緣を結びて曰く、「象はモガラーナ、猿はシャリプッタ鶉は我身是なり」と。

○太子詣で

多生曠劫の因緣熟して此度法隆寺磯長等の靈地へ詣でぬ。十月八日京都を發す、小春日和の麗かなる空、日光をあびたる豐けき稻田爽快いはん方なし。宇治川、十津川等の流も行々眼下にみゆ。かねて物語に聞きし古蹟數多手にとる如く眺められ興つきず。法隆寺へ着けば恰かも古代に還りし心地す。御寺に到り案內乞ひしに、ゆくりなくも菅瀨師に遇ふ。師は前日より此處へ來りたまひしよし、不可思議の御引合かな。共に打連れて先づ金堂を見る。仰ぎ見れば千有餘年の大伽藍今も昔の儘なる、たゞ驚嘆の他なし、寶藏を見終り豐聰殿に到るに內帳深く太子の御像座したまへり。端嚴の溫容恰かも太子の靈內に居ますが如し。世間虛假唯佛眞の御高訓身に泌みて覺ゆ。夢殿に到れば豫て見奉らんと願ひし觀音の靈像目のあたり拜し奉り、嬉しさ云はん方なし。さながら生ける如く笑み給ふ。中宮寺に到るに優しき尼君に迎へられ、如意輪觀音を拜す。衆生の思を思惟し給ふ御容いと有難し。天壽國の曼陀羅をも拜するを得ぬ。大僧正自ら案內したまひ、御寺隈なく拜觀せしめらる、何等の幸ぞや。後菅瀨師と共に磯長へと詣づ。師は此あたりに暫し住み給ひし事あれば車中、あたりの古蹟など悉く說き示されぬ。嗚呼奈良は昔懷しき處かな。喜志と云ふ停車場に降り、車にて行く、汽車中眺めたりし金剛山葛城山等漸く近づく。忠臣の志今も此山に籠れるに似たり。家々河內木綿を織る。御廟に詣づれば森々たるあたりの樣、云ひ知れぬ聖き感あり。「一度參詣する者は」の御文まづ胸に浮びてありがたし。恭しく廟前に跪きて三骨一廟の因緣を忍び、辱なさに涙こぼる。阿彌陀經を誦し了りて廟を一周し、こゝより上へ續く山へ登る。金山花崗石の地質にて小松繁り合ふ。全國一眺のうちにあり。頂に碑あり、古此處より光を放ちしと聞くからに勿體なき心地す。折しも夕陽沈まんとして天は晒色にそめらる。太子此處を勝地と稱へたまひしも實に故あるかな。あはれ佛敎の基礎を建てたまひし皇太子の古こそ慕はしけれ。

告白

故菅瀬夫人の日記

菅瀬夫人は世にも希有なる信者にましまして、妙好人傳中に入るべき方であつた。菅瀬師同和學園の園母として主人を助け、園員を愛撫すること子の如く、炊事住居の世話を初めとして、特に各己を信仰に導かんとて苦心慘憺せられたる事、全く佛心の實現たること一點の疑を存することは出來ぬ、夫人は久しき已前より求道學舍の日曜講話を來聽せられたりしが、其菅瀬夫人たることを知らなんだ、一日其名を尋ねしかば初めて名のりたまひて且つ入信の狀を告白したしとのたまふ、乃ち其夕來訪したまひ、親しく語りたまふ、其事、君の記錄に出でたり、其時如何にも自己か心中のまゝを披瀝したまひて一點の修飾なき告白には眞の佛心を拜みたてまつりた、要するに信仰に入りたまはざりし己前には菅瀬師の母上が連れて上京したまひしも、又學園其れ自身にも意義を見出すとが出來なかつたのである、然るに一たび如來大悲の親心を頂きたまふや否や、母上の御恩は勿論のこと、學園其れ自身の眞精神を體得して之がために犧牲となるべき決心をなし、遂に一身を之に捧げられたのである、かく夫人の精神も人格も唯信仰の一によりて實現されたのである、夫故益〻純一無雜の眞心たることを知ることが出來るのである、一度夫人の告白を求道紙上に載せて貰ひたいと思ひ、本年三月頃御願をいたしたのである。其時早速日記を齎らし來りて、然るべき個所を載せたまへと渡されたのである、隨分何事も露骨に飾なく書き連つねてある日記を他人の前に提供するといふは如何にも一點も表裏なき公明なる態度である、されど此方では取捨に迷ふによつて、御自身が拔萃せられんことを請ふた、されど其時はまた他日を期することゝして、告白を延ばされた、かくの如き御本人の志であつたから今は其日記の一部をば告白として載せて貰ふことゝした、日記には後の見る人が一人にても信を取るやうにもあれかしと思ふて書くとある、何んとやらん今日あることを豫言されたやうにも感ずる次第である、冀くは讀者諸君其心して熟讀せられんことを、本月九日我一家法隆寺に詣づ、不思議なる哉菅瀬師先づ在り、乃ち相伴ふて磯長の三骨一廟に參詣し奉る、恐くは是れ故夫人の我等を導きたまふにあらざらんや、南無阿彌陀佛。

明治四十一年

○二月二十二日。朝起き先づ食事をすまして仕事をなし、終日外出せず。午後二時過佛陀の大慈悲を感じ涙を流したり。隣家の狂人を見て親なき御事をあはれに思ひたり。下女なども少々怒りたる樣子なれども、吾は依然として怒る心起らず。

斯く相成れば下女も自然に自分よりあやまり來りたる有樣、佛陀の大慈悲を感じさせて頂きたる上なれば、誠に現當二世の御利益を蒙るとは有難き事。

○二十四日。朝より法義の話を伺ひたり。此日朝は兄上に年回の手紙の返事を出したり。相變らず常より考え通り、學園をあづかり居るにもかゝはらず餘りに無責任になると思ひて斷りたり。此夜は佛前に參りたる時園員皆參りたる姿を見てかわゆく感じたり。夫につきて此夜は如來己に我れを拜み下されたから、今日私が信仰に入る事が出來たのであるにもかゝはらず、自分で心得たやうに思ふているのはあさましき限りなり。子の母をおもふ如くにて、衆生佛を憶すれば、現前到來とほからず、如來を拜見うたがはず。嗚呼かはいや園員の者共、如何にもかはいゝ事なり。南無阿彌陀佛々々々。

○二十六日。此夜は不思議にも吾が日頃祈りつゝある御法義話初まり、如何に園母の心にはうれしく感じたる事なりし。嗚呼いつもよろこばして頂くは「たま〳〵行信を獲ば遠く宿緣を慶べ」との御言葉、吾も常に思ふなり。過ぎし頃『新公論』に天に貸せ、天に貸せと申すは働きて天に貸せ、天は決して勘定ちがいなしとの御話、われ伺てよりは常に思ふなり。然るに或日洗濯をして思ひたり。嗚呼我は天に貸して其報ひを待つが如き手ぬるき事にあらず、我ははや如來に助けられて人樣より先きに信心をいたゞきぬる身が、人並同樣の考をもちいるこそはづかしきと懺悔いたしたる事を思ひ、只南無阿彌陀佛々々々。

○二十八日。朝少し寒く感じたり。此日は如何も天氣よかりしを以て先づ湯をわかし、例の洗濯を初めたり。此日は隨分洗濯いたしたり。其の間色々吾身の幸か否かなど考へおりますが、其中より又思ひ出したるは吾身のからだの健全なる事、日々御恩報謝させていたゞき居るはなど。又其暇に財政の事を思ひ、或は吾が帶を作らんなど色々思ふ中より又我は社會最貧民の事を思ひ出し、其中洗濯を終へて又思ひたり。吾が身體にあしき所なき爲不足ばかり思ひおると又思ひ出したり。嗚呼。

あすありとおもふ心のあだ櫻夜半に嵐のふかぬものかは

嗚呼有難し。南無阿彌陀佛々々々。嗚呼只感謝の意あるのみ。有難たや。吾昨年冬思ひたり。今年四十年二十一歲といふ年は紀念なり。信仰にいらしていたゞきたる有難き年なりきと。しばらくは如來の御大恩を感じて深く感謝して只々涙のみにて嗚呼、時計を見れば彼れ是れ四十分ばかり無宙にて念佛相續致したり。南無阿彌陀佛々々々。煩惱を斷ぜずして涅槃を得るとは實に有難き事なり。

○二十九日。今日は晦日の事なれば朝より支拂ひなどの支度をなして午前を費し、中食を終へて日誌を書きつゝ、其中にも喜びの心起ると思へば又煩惱、煩惱の起ると思へば又喜び出で、誠に凡夫の心の淺間しき事只々あきるゝのみ。又明日は日曜なれば近角先生の所に參るのかと思へば、如何に嬉しく思ひたるか、心中おして知るべし。南無阿彌陀佛々々々。

○三月一日、此日は日曜日なれば求道學舍へ參らんと思ふて仕度をなし、思ひ叶ふて遂に參詣いたしたり。此日は學舍の御部屋を拜見いたし、自在丸樣などゝ御佛前に御禮いたした

り。

○三月十四日。今日は晴天なりし爲め先づ朝仕事を了へて佛參し、下田先生の御元へ伺ふべく出掛けた。先生の御談により隨分私も頭をいはへました。然るに先生は私和歌をほめて被下ました。兎角練習せよと申されたのであります。此日は自分ほど考への低いいやしひものはないとて色々心を碎いた事である。世中に何一として私思ふ如く行くものはなし。嗚呼恒に思ひ浮べるは如來の大恩なり。

治まれる御代こそ仰け九重の今霄の月をみるにつけても

誠に難有事南無阿彌陀佛々々々。

○十五日。今日は風もなくよい天氣でありました。昨夜福間樣の電報にて主人は伺はれた。今朝一寸歸園致されたが私は小言のみ申上て誠にあさましきことゝ感じた。午后になりて森恒大郎樣久振りに入らして下さいまして色ろ〳〵話を聞かせて頂いた。此夜早見樣入らせられました。よりてせんべいを買ふて御茶を飲み乍ら福間父上の御談をいたし深く感じた。此世の事にのみ執着して居りても死なねばならぬのである、南無阿彌陀佛々々々帶上より例のあれをとり出し讀みて落涙いたしましたのであります。吾かくも裁縫が出來ますも堀内樣の御陰と思ひ萬人に向て感謝するのであります。此夜主人はやはり福間樣より歸られませぬてしたから私は十一時頃床に入りましたが先づ如來の大慈悲を感じましたが遂に親樣のふところに入りて休まして頂いた。南無阿彌陀佛〳〵。

○十八日。今日は雨天なりし爲外出もせず只内にのみひこみてをりた。然るに吾心には皆なの人をかわいく思ふてしきりに堪へなかつた。此日は別に感じたる事もなかつたが主人のしらせにて福間樣の死を聞き驚いたが、今は父上の御跡を慕ふて行くのであると思へば御淨土が何となく慕はしくなりた。南無阿彌陀佛々々々。

○二十七日。今日は朝より福間樣を送るべく思ひて、朝主人は根岸に立たれました。私は湯にゆき中食を了つて福間樣を送りた。其途中は如何なる善因ありて今日父上の御還りを送るかと思へば涙も出るばかりにうれしく、又新橋にては福間家の人々が根岸笹雪に御住いの時のことなど心に浮べ如何にもなつかしく、又自分は一人の兄上を設けたと思ひてうれしくてたまらなかつた。又嗚呼現在學園に居る人も如何にしてか早く信仰に入りて下されればよいと思ふて祈る如く思ふた。色々その感に打れて居るうち時間がきて汽車は西をさして發した。嗚呼〳〵。南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。自分は福間氏と肉體は離れて暮すのであるが、心は同じ悟りの淨土なり。有漏の穢身は變らねど、心は淨土に遊ぶなりと思へば、何とも云ひ樣なき感じがいたした。不思議にも歸途電車にては只念佛のみ稱へてをりた。又吉崎氏も早くわかりてくれゝばよいと祈る如く思ふた。其内本郷四丁目に下車し寶閣樣の宅を伺つて奥樣にも御遇ひ申した。其日うれしき事には此度知人の奥樣など集りて信仰の會を開く樣申され、誠に自分はうれしくて何となく心の中にたのしく感じた。此夜宅に歸りてみたら姉上から手紙が參りてをりたけれども、先日來の趣きにて變らぬ樣子にて是非下れとの御言葉、吾もちよいと古郷に參りて燒香いたしたく思ふなれども、併吾も昨年來考へをる

通り、どうも下るのは自分に大きなる責任があるにもより、尚佛陀の御慈悲をしみ〳〵と喜ぶ事もむづかしく、却て近角先生に御依頼して御讀經を願ひ、しみ〳〵と如來の御恩と兩親の御恩と慶ばしていたゞかんと思ふて自分では定めた。如何なる御兩人の御言葉があるとも、吾は依然として動かないのである。即ち佛陀の大悲を慶べは別に歸郷しなくとも宜しからん。私は昨年來兩親にをわびを申上て居る。常に兩親に懺悔し居る。又人並ならぬ大責任のある身如何にして歸郷致されようと假に女心に定めたのであるが、然し夫のある身一應主人に相談を申上る事ときめた。南無阿彌陀佛。

○四月一日。今日は夕べから引つゞいての夢やぶられて又目がさめたが、併し今日だけは休みてをらんと思ふて又た思ひなほして床をはなれました。二時泉兄上が入らせられた。吉崎兄上も大變信一氏に同情して居て下された爲め、信一氏も及第ときくからは非常にうれしく思ふた。嗚呼兄上方が二人程信仰に入りておるからはもはや大丈夫だと思ふた。併し早く良造氏も信一も信仰を得てくれないと園母はたまらないやうである。此日は別に何も致さずぐず〳〵して一日をずこしたのである。併しやはり又元の如くにはなりませんのであります。嗚呼自分は斯く思ふた。吾こそは五年も十年も休まないでねようといばりておりたが、愈々自分の力で如何にいたす事も出來ないと氣がついた。只時々思ひ出しては南無阿彌陀佛々々々、冥加に餘る御大恩々々。父上が御存命の時は常に冥加に餘る御大恩々々と喜ばれた。此夜は御影樣でよく休まれました。夜中に思ひ出しては南無阿彌陀佛々々々と念佛しては又た休みた。御慈悲の御佛は「忠子」能くきてくれたと、夜に甚に喜んで下されるであろうと思ふと又たうれしい事。何を思ふてもうれしや、彼を思ふてもうれしや。嗚呼南無阿彌陀佛〳〵。

泉兄上は翌二日を以て神戸に赴かるゝのである。但し吾の泉樣を兄上と申上るは泉樣も御信仰に御入りあそばしたる御身、この無學の忠子も御信心いたゞかして貰ふてゐる身、さすれば彼は年長の事なり、吾は年が少ない故に泉樣を兄上と申したるなり。故に吾は妹なり。常に泉樣の御いでになると吾は兄上が御いでたと云ふて、いつでもとんで出るのであります。又吾々は今一人の兄上がありましたが、此の方は去月廣島縣江田島に御歸りになりました。今は泉兄上を吾と二人なのです。併し又た福間父上の御子甲松兄上も此頃は御信仰に入られましたさうです。今は兄弟三人になりました。これこそ萬劫までも變らぬ兄弟であります。併し今は近角姉上は御里に御出でですから妹は一人でさみしいですよ。私は姉が少くないのですよ。きゝますと藤岡樣の奥樣も姉樣ですよ。嗚呼今は福間母上は神戸にゐられます。丸茂母上は上野櫻木町にゐられます。英母上は銀座にゐられます。私は妹もありますよ。學園の兄上は皆假の兄上ですよ。早く兄上は信心を得て下さればよいと毎日思ひます。近角兄上樣は此頃は御他行中じやそうですよ。うれしい事には此五日には御參りがてきませうと思ひます。南無阿彌陀佛。

はやく御信仰に入りて下されよ賴みます。内にも兄上はた

くさんおられますがまだほんとうの兄上ではありませんよ。中にも吉崎良さんは學園に長く居られました。また私の國と一しよですから、日々早く信仰に入りて下されればよいと思ひつゞけますのよ。何ぜ此の世に執着しておるのでしよう。ヤヨ兄上よ妹の氣を汲みとりて早く信心を得て下されませぬか。やよ良兄上よ、私は彼の一人が信心を得て下されば大へんうれしく思ひます。此の世の中に生れて來て法をきかずに歸りてくれると困ります。又たかきましよう。午後求道など拜見いたせば難有くて落涙すれども、又書物を拜見せずと居ると又たおうやうになります。兎に角念佛三昧するが宜しい。

○四日。今日は兄上の御歸りないのにちと困りました。此夜深く感じました。他でもない小笠原さんが入らせられて食事中の御話に鎌倉の長谷寺の御話が出ました。此寺は旅館同樣になつて居ると聞き、ちよと自分も左程ではないかと心配いたしたが同和學園が道境にたちておるにつけても斯く思ひました。學園が旅館になりはしないかと思ふたが、併しイヤ〳〵よく考へよ、此考へが浮ぶのも學園がありた爲、物本末有事終始有の御言葉、如何にも思ひ出した。又一時の夢を見てゆめのよしあしについて嗚呼彼れ是れいふてはいかないと思ひひて、便所に入りて深く考へ、又本心否佛心に立ちかへらして貰ふたのである。南無阿彌陀佛〳〵。落涙いたした。二十分餘も感謝にうたれて涙と共に喜ばしていたゞいた。此時思ふた兄上が東京へ上京されれば何にもいらぬから只妙好人傳を一冊御頼みしよと思うた。かく落涙すると、たま〳〵行信を得ば遠く宿緣を慶べとの御言葉誠に難有い。阿彌陀佛此所を去ること遠からず。又た嗚呼福間樣も此處にゐらしやるだろうと思ふと、只々感謝に堪へません。又た今晩の食事をするは如何なる善因によりてなすかと思へば有難くてたまらない。又た種々考へると誠にたまらない。學生さんや下女などを見ては未來また長い間迷ふと思へば、『超世の悲願聞きしより、吾等は生死の凡夫かは　有漏の穢身は變らねど、心は淨土に遊ぶなり。』又斯く感謝にうたれて落涙するやうに誰がしたかと思ふてみれば、答ふるものは一人もなし、やはり忠子である。嗚呼泣くほど感謝する樣に誰がしたか、他なし御佛なり。嗚呼長い間御親に御心配かけてすみませんでした。嗚呼すみませんでした。どうぞ御許しなされて下されませ。今度と云ふ今度は一ばんがけに淨土に往生させていたゞきます。何卒長い間の迷を御許しなされて下されませ。さぞ御佛も御覽遊ばして嗚呼忠子よくきいてくれたと御喜び下さるだろふ。嗚呼長い間迷ひに迷ふておりました。アヽすみませんでしたと又感謝いたすより外はない、南無阿彌陀佛〳〵。そばで見て下さる大悲の御佛の如何にも恐れ入ります。吾れは今御佛を拜みておるやうに思ふてゐますが決して左樣でないので、佛已に女人をすくはずんば吾正覺は取らじとまで本願を起して下され、長い〳〵間御苦勞下されて如何にも有難い事、何事のおはしますかは知らねども只だとうとさに涙こぼるゝ。南無阿彌陀佛〳〵。斯くして長々とかいておけば後にたれかゞ見て佛緣を結びてもろうて、又た私の跡をおふて來て下さると思ひまして、斯く下らぬながら書き記しておきます。又自分ながらも日誌を見て又喜びを起さしめるのである。嗚

呼如何にも有難い廣大なる御慈悲でございます。「ひとたびも佛をたのむ心こそ誠の道にかなふ道なれ」「罪ふかく佛をたのむ身になれば法の力に西へこそ行け」「法をきく道に心の定まれば南無阿彌陀佛と稱へこそすれ」と上人は我身ながら本願の一法の殊勝なる餘り、斯く口にうかぶに任せてかき記し畢んぬと、嗚呼有難ふございます。何卒早く園員のものどもよ、信仰を得ておくれよと朝夕祈りております。御文章には一文不智の尼入道なりと云ふとも後世を知るを智者とすと云へり。又た大和の丁妙は帷一ッをもきかね候へども此度佛になるべきよ、堺の日向屋は三十萬貫を持たれ候へども死にたるが佛にはなり候まじとの御話がありた。忘れぬ樣すべし。南無阿彌陀佛。

○七日。朝より御念佛を相續しておりたが、昼前に深く御佛の御慈悲を感じて落涙いたした。只だ感謝の意あるのみ他なしと思ふたが、又種々の思を起しておるが、併本心にたちかへりて「そらごとたはごとまことあることなし」と又御佛の事を忘れて籠より水が出たと思ひて、仲々苦しく思ふた。嗚呼「あすありと思ふ心のあだ櫻夜はに嵐の吹かぬものかは」又人並同等の考へを持て居たと思ふと甚だ苦しい、兎に角萬感こもゝ〳〵至るときは南無阿彌陀佛〳〵。嗚呼、此夜は子供が三人ばかり來た。併し自分の日頃の思ひが届いたと見え、關氏も自分の心がわかりたらしくあり、又其外の園員なども自分の心を知りてくれるのがうれしくありたが、まだ〳〵自分には親心にはうれしくありません。なんと云ふに彼の子供等が信仰を得てくれねば少しもうれしくありません。けれども自分の心の内には常に彼等を祈りております。なんではやく親心がわからぬかと。併泉兄上と福間兄上と二人信仰を得ておるから、良造も早く信仰を得てくれねば此の親は長い間世話をしたのも水の泡となる。よりて子供等よ一日も早く園員の信仰に入るべき時を待ております。其の内にも良造子は不思議の緣にて學園に入られたのであるから、何卒信仰を得て社會に立ちて下されよ。此親は昨日や今日や一度や二度やの頼みじやないので、昔より否吾れ信心よろこぶやうになりてよりである。又藤本氏もかわいく思へども、何分にも平井氏には是非信仰をすゝめる積なり。自分は常に便所に入りて念佛を稱へます。何となれば島田先生の御話を思ひ出してゞあります。下女まさを見ても不憐なり、嗚呼如何にもかわいや、南無阿彌陀佛。これより床に入りて御親のふところに入りてやすましていたゞきます。

○八日。今日は釋尊の御降誕會なるが朝起きみれば雨降りて皆の人が御困りでしよう。嗚呼何時も思ふは先生の「物本末有、事終始有、先後する所を知るは道に近し」、御文章の中にも本を忘れて末にはしるなと蓮師は御親切に仰せ下された。又た今朝感じたるは如何なる善因によりて今朝の食事をなすかと、又人間萬事まちがつておると思ふて實は殘念でたまらんのです。今日は藤戸氏に御出の事なればいざや治療してまいりましよう。昨夜は近角兄上の夢を見ましたのですよ。嗚呼たま〳〵行信を得ば遠く宿緣を喜べ、南無阿彌陀佛。午前十時頃國の兄上より手紙がまいりましたが、併兄上の御言葉には最も父母樣の佛事に參詣いたさずば全く不孝の子と

思はるゝも無理ならず。世間の前もあるとの仰せなれども、併自分は思ふたのである。世間の爲に佛事するのではないので、父母樣の御靈に對して御恩報謝するのであるから、吾は昨年來父母樣に信心をとりて御恩報謝をいたさんと思ふて居ります。現に日々に父母樣に御詫び申上げて居りますのよ。父母樣よ、何卒御許しを乞ふ。吾には大なる責任もある。又佛の事などもいかに形は有難たさうにしても、心で報謝の意がなければそれは駄目です。故に兎に角自分は下廣はいたしませぬ積です。罪を造りに行くやうなものであるから決して行かぬ。又吉崎氏の御　の如くであるから却て下廣いたさない方がよろしい。のみならず行く其日より罪を造くるは父母樣にも草葉の蔭で御心配をかけるやうなもの。嗚呼、昨年來の決心を實行いたし、又た社會の最貧民の例も思ひ出し、此の場合は決して(過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し)の御文はいらないと決心します。故に吾はどこまでも行かないのである。堅く決心いたします。吾は如何にして歸國する事が出來ましよう決して出來ません。嗚呼、兄上よ御許しなされて下されませ。假の世であるから兎に角かへる事をたのしみて居りてはそれはそらごとなり、南無阿彌陀佛〳〵。今日釋尊の御誕生日にて夕方非常に人生的の事についておもしろくなかつたが、それが御緣にて如何なる譯にや求道を讀ませていたゞいて落涙した所へ良造がかへりた。子供が歸りたやうな氣もちがした。嗚呼有難い事、御誕生日にこんなに喜ばせていたゞいたは實に不思議ではないか。

○九日。今日は又不思議にも又盡頃彼等のまちがつておるのを見ては、又それを御緣として嗚呼感謝にうたれたのである。今日は早や四月九日といふに大雪とは呆れた。それを見ても又た思ふは「祖師は紙子の九十年」長い間彌陀は御苦勞下されたと思ふと感謝に堪へません。午後雪の中をもいとはせられず加賀美さんが私を訪ふて下された。うれしいのと、又只今自分の境遇の變りはてたるにて、なんとなく妙にかんじましたが、併昔の友の事故色々と古郷のお話など出て、夕方までおもしろくお話いたしました。自分は思ふた。之れより御慈悲に引きつけんと思ふたのである。

兄上樣御心切は有難う御坐います。又た御言葉は御最もでございます。併今は學園をあけるわけにまゐりませんもの故に、此度は大切の御佛事に參詣いたしません。何卒惡しからず御許しなされて下されませ。私は父母樣に兩手を合せて御斷りを申して居ります。南無阿彌陀佛〳〵。

○十日。今朝はよい天氣になりました。併し雪はまだ解けきれませんです。御佛前に參詣いたした時深く感謝にうたれ、如何にも阿彌陀佛此所を去る事遠からずの御言葉通りに、常に此頃は感謝にうたれて居ます。又た食事の時は自分の只今の奢りきはまりてゐる生活如何にも恐入ます。嗚呼併し此の御慈悲に出逢はしていたゞいたは誠に有難うございます。南無阿彌陀佛。「山は山道は昔にかはらねど變りはてたる吾心かな」「明日ありと思ふ心のあだ櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは」「如來世に興出し給ふ所以は只だ彌陀の本願海を說かんとなり」此の次國へまいります事につきましても、吾は社會の最貧民と思ひ、又大なる〳〵責任のある身と考へて見れば、

如何にも學園をあける譯にまゐりませんのよ。南無阿彌陀佛。昨年の夏の通り萬感交々至りたる時は只々南無阿彌陀佛〳〵。

○十三日。朝起きて自分は佛前に御禮をしてゐましたら、伊藤氏は愛らしくも吾のうしろにきて拜禮してまゐりました。つゐでに御讀經をなして行かれゝばよいと思ふてゐると、かれは次の間で自分の蓮如樣の御一代記聞書を讀ましていたゞいてゐたのを禮越しに聞きて居られたから、自分は非常にうれしく思ひました。併し彼れには確乎たる信仰があるかは疑はしかつた。併し自分は大變にうれしく感じました。嗚呼よく聞てくれたと感謝に堪へなかつたのである。今夜廣島の主人より手紙をいだゞきました。其の要領は御佛の御計らひは誠に有難いと云ふ事と、又た大恩人なる母上の御病氣につきての看護申上る事につきて、主人より御樣子がありた。中にも至て深く感じさせていたゞきたは、主人は母上看護のためには同和學園を止めてもとの御文を伺ふより、自分は深く思はしていたゞきた。斯くの如く學生の人と生活をして居るは他なし、只だ如來の御慈悲を知らせんが爲めである。然るに主人は斯の如き事を申されると思ふた。それより又た思ひ起したは先生の「物本末有、事終始有、先後する所を知れば道に近し」何にを申しても御母上のいましてこそ、斯くも私は御法義が大切に否佛心を味はさせていたゞき、其母上のいましたらこう芳英氏も御出でになりたのである。然るに今は母上の大病、尙母上には御信仰は薄からふと思ふから、佛忠子を下らして母上に御恩報謝として法をすゝめよとの御仰せなり。嗚呼これも如來樣の御恩召、如來にも有難い事なり。南無阿彌陀佛！。深く御佛に感謝いたします。嗚呼如何にも如來の御恩は有難い事。

○十六日。今朝は國へ行く爲め種々あとのしまつなどをして居りたが、女のあさましき心には如何にして女のつれが一人しかないもの故にいつも下女相手にして居る。嗚呼(二ツ子)を相手にしておりたと思ふては又本心否佛心にたちかへらしてもらう。嗚呼心は依然として動かないのである。南無阿彌陀佛〳〵〳〵。

午後島地樣へ御同ひいたしました。其歸途往來の人を見て種々と虛榮の心を起して、いろ〳〵と人の立派なる有樣を見ては又煩惱にまなこさへられたが、併自分は依然として只念佛のみ稱へてかへりたのである。其內に又た本心否佛心にたちかへらしてもらふたのである。只如何にも佛恩の宏大なること。併餘り辛らく又氣兼のあまり、嗚呼いやだ〳〵と思ふて隨分つらいこと。併し又思ひかへさしていたゞきますのよ、本心否佛心に。嗚呼、でも隨分つらい事、ゐやだと思ひますけれども、併し南無阿彌陀佛〳〵。早く母上の御許に行きたいのよ。併自分はつらいわい。嗚呼南無阿彌陀佛〳〵〳〵。丁度此夜學生の人の食事の小言を聞きて自分は深く感じた。自分は幼なき時兄上より八ヶ間敷云はれた。のみならず父上の今思へばやはり御信仰が御ありになりたと思ひますが、粗末な食事に甘じて居られたのみならず、自分は生れるより父上の感化を受けて、今日では食事の小言どころか、却て嗚呼奢りきはまりてゐると思ふて實に感謝に堪へません。

嗚呼實に感謝に堪へません。此夕景は御佛の御導きか不思議なる御緣にて森の中を散歩した。併しきたない〳〵。口の中では念佛三昧のみてありた。斯くすると嗚呼第一に思ひ出すは菅瀨母上の御事、次では芳英主人の事、如何に御恩を御かへしいたさんかと思ふてぶら〳〵散歩して居ると、實に考へは色々と。嗚呼明日は主人が御かへりになると思ふと、二三日内には母上の御看護に、否な父母樣の御佛事に古郷に行かしていたゞくやう相成るとは、嗚呼有難ふ御坐い升。實は昨年父母樣には前以て御斷りを申上てゐる。吾は前からの約束にて財政困難の爲め昨年の御法事には參詣いたしません。父母樣は此忠子の御慈悲にきづかしていたゞいたる事を以て御ゆるしを乞ふと日に一度となく二度となく、口くせのやうに御斷りを申上て居ましたのに、又た兄上からも再三の御案内をいたゞいておりながら、二度までは參詣いたさぬやう申上ておきたのに、三度目の手紙を差上んと思ふたが、ふと主人のかへられる迄と思ふて机のひきだしにいれておゐたところが、御導きは有がたい。菅瀨母上の御看護させていたゞくとは、嗚呼有難い勿體ない。否表面は御看護とて歸國いたせども、今日の忠子はそんなまぬるき事ては御坐いません。ひたすら母上に吾信仰を御分けいたして、否母上を御手引きして、共に無量永劫たのしましていたゞく身と思ふと、嗚呼實に感謝に堪へません。

この忠子の涙をながすやうには誰がしたと思ふと有難い事。昨年來より父母樣に御斷り申しておいたこの忠子は、今又御佛の御引合にて歸國させていたゞきます。嗚呼早くかへりて母上の御許にと思ふと、心はいら〳〵致します。然るに不思議なるかな住みなれし都の學園をあとにして歸國いたすも心ならずと一旦は思ひました。否幾度も思ひました。あゝ併し此ところをよく考へなければならない。斯く一生懸命に學園の生活をしようと思ふやうに誰がした。あゝ忠子よく考へへよ〳〵と御示し下さる。ひたすら母上の御陰。東上も母上の御影。東上せずは信仰には入らざりしかもしれん。只今の逆境は如何にも幸福なりと、又思ひかへすは「物本末有、事終始有、先後する所を知れば道に近し」と思ひかへさしていたゞきます。南無阿彌陀佛〳〵。

○二十二日。朝感謝に打たれた爲め落涙いたしました。いつも自分の仕合を喜ぶのてあります。

○廿五日。三年ぶりに母上を見舞ふべく廣島に向け出發した。途中只母を思ふて落涙いたした。汽車中求道を見てをりたら　私の向ふの乘客が拜見といふたてうれしくありました。其時も園員の事を思ふて誠にすまないと感じた。南無阿彌陀佛々々々。

○廿六日。無事に着廣をしたが、併母上の事を思ふと涙にむせびた。嗚呼大恩人なる母上に御目にかゝりた時涙を流してよろこんだのである。どうぞ母上樣早く御慈悲を聞きて被下いよと思ふた。南無阿彌陀佛々々々。

○廿七日。朝より母の看護を一生懸命にいたし、いつも夜に至りて落涙いたします。昨夜も母の大恩を感ずるのみならず。東京の園員を思ふてかわいくて落涙いたしたのてある。嗚呼いつもまろこばして頂くは、『たま〳〵行信を獲ば遠く宿緣

を慶べ』との御文、南無阿彌陀佛の稱名はいつも稱へて居るのてある。難有こと。

○六月三日。今日は朝よりふとんを作らんと思ふてをりたがいよ〳〵目的が屆いて出來上りました。朝の御說敎がすみましてより只感謝に打れた。又夜分も思ふた。あゝ母上は私の爲めに御病氣になりて下されたと思ふた。あゝ母上をそれいります〻〻〻〻。吾は子供てありますが、俊生の一大事となつたら子供てはありませぬ。南無阿彌陀佛〳〵〳〵。

○四日。晴天、今日日中の御法座にまいりては深く感謝をいたしました。嗚呼、母上の御病氣恐入ましたのよ。〻〻〻〻〻〻。南無阿彌陀佛〻〻〻、難有う御座います〻〻〻〻〻〻。阿彌陀佛〻〻〻。如來樣恐れいりました。此つまらない私にあなた樣より御頭を下げ下さいまして私を喜ぶ樣にして頂きたのてある。又恐入ります、忠子やよく聞いてくれたと、あゝ、またも頭を下げて下さるかいなゝ、恐入りました。南無阿彌陀佛〻〻〻〻〻〻。良造よ政介よ捨雄よ勘六よ哲次よ、こらへてくれよ。大恩ある母が病氣ゆへ看護に下廣したのだ。御前等は知らないが何卒こらへてくれよ。良造よ政介よ汝ぢらも早く御法義を聞きてくれよ。『如來世に興出し給ふ所以は只彌陀の本願を說かん爲めなり』人生の最大目的は出離菩提轉迷開悟より外にはないぞよ。にくければ殺してくれよ、良造よ、政介よ。御前等が殺して忠子は死ぬるけれども、此れはだめだよ。南無阿彌陀佛は御前等の力にはかなはない。良造や政介や哲次や勘六や捨雄や淨玄や。母の如くなれよ、此母にさからつたところが御前等の力てはりあふ事は出來ないよ。學問てはないよ、只南無阿彌陀佛〻〻〻だ。菅瀨の母上は吾等をかく迄て愛して下さるが難有事〻〻。かく私が感じさして頂くまてての母上の御心を察しますれば、とんて歸りて看護を申上ねばならぬ。母上よ私しの看護が氣に入らねば、殺して被下さいよ、母上殺して被下いよ。今日母上の手にて忠子は死ぬるとも、南無阿彌陀佛の御六字は母上の手にも、父上の手にも合はない。『そらごとたはごと誠あることなし。』『物有本末事有終始知先後所道近、』『あすありと思ふ心のあだざくら夜半に嵐の吹かぬものかは』南無阿彌陀佛〻〻〻。

○六日。明日兩親の法事をいとなむ爲め和木に參りました。如何なる善因によりてかと思ふてよろこび〳〵〳〵行くべく始めた。只一人の母上をあとにして、誠にかなしいやら殘念やらで涙とともに矢口を出て廣島に行きたが。調度此日は矢口に下舟がなかつたて廣島迄あゆみた。ところが廣島驛に着いた時には一列車遲れて午後四時迄まつた。其間驛にて父上の御遺忌の本を拜見いたした。岩國の人にも一部さしあげた。時間がきたりて汽車に乘りても、其途中も誠によろこびがつづいて御念佛のみてありた。河内驛に着し車にて和木に着したときは午後九時てありました。車の中にても色々慶ばして頂きた。

○十四日。朝より別に煩悶は起さなかつたが、畫飯をいただくとき一寸煩悶がをきかけたが、嗚呼自分は早や親樣の御慈悲の中にすましていたゞいてをる身が、いつ迄も人並同等の考を以てをるのは誠にはづかしいと思ひ、母上の御病氣を見てはあ—人間は夢をみて居るわいと思ふて、母上の樣になれ

ば何にも入らない、只信心一つのみと思ひて深く感じた。同時にアー人事ではないぞ、御佛より忠子これをみよ、人間五十年の出來事は皆うそじやと御姿に御かけ下されての御教化とは實に難有。あー母上は私の爲に犠牲になりてをつて被下ると思ふと、やれ〳〵恐入ました南無阿彌陀佛〳〵。阿彌陀佛此を去ること遠からず。思へば思ふほど報謝の稱名いさましく相續させて頂かねばならぬ。

○十六日。朝より煩惱に眼さへられて攝取の光明みざれども大悲ものうきことなくて常に吾が身を照し玉ふ。思ひかへしてはお慈悲にたちもどうしていたゞく。如來は常に吾の心を御存しだと思ふてよろこばしていたゞいた。午前は看護をいたしたが、其内昼食をすましたところへ矢口より看護人がまいりましたから洗濯などをしてをります。と午後三時院長樣より私を呼ばれた。ゆきたところがかねて覺悟の母上の難病なるをつげられた。私は心では大にをどろいたが、『物皆前定』でありますから、心をなるべくをちつけてと思ふて、まづ東京と父上に手紙をだして、心に餘裕がありますから日誌をもかゝしていたゞいた。あー現當二世の御利益とは誠に難有ことゝ思ふた。

○十八日。朝九時過佛陀の感謝に打れた。それと云ふものは東京より手紙がまいりた爲めである。母上に芳英氏よりまいりた手紙の樣子を申上たら、先日福島大順師（伯父河提勸學の高弟）が往生について不審はなきかと問はれたから、『私は幼きときより聞かしていたゞいてをる樣に何の造作もなくまいれると聞かして頂いてをるから御安心ください』と答へた。

と母上の吾にかたられたのである。それを東京に云ふてやれと云はれた。あゝ難有こと。母上の御信仰の誠に美はしいには驚いた。阿彌陀佛此を去ること遠からず。南無阿彌陀佛〳〵。

○十九日。朝より一生懸命如來の御用召と思ひて報謝の稱名もろともに働かしていたゞいたのである。いつも信仰の偉大なる力のある事には實に驚くべきである。午後二時頃殊に御慈悲をよろこばして頂いた。母上召し上る氷を買ひにゆきてよろこばしじいたゞいた。南無阿彌陀佛〳〵。

○二十六日。嗚呼難有ことには今日も午前十一時頃、非常に慶ばして頂いたあの屏風の繪をみてあゝあの屏風の繪は立派だなー。あの美しき繪を見るに付けても極樂のことを思ひ浮べ極樂に往生させて頂いたらどの樣にあらふかと思へは慶ばずにはをられぬ。『咲きつゞく花見る度になほもまたいと樂はしき西の彼岸』南無阿彌陀佛〳〵。今死んても後生の一大事はだいじない。萬感交々到るときは只南無阿彌陀佛々々々。

○七月三日。今日も朝よりぐず〳〵してをりたが、自分は非常に責任が重いと感じさせて頂いた。午後隨分暑さきびしくなりましたが、心は依然として動かなかつたのである。嗚呼何を申しても何より信仰が必要と思ひます。嗚呼人生の間の事を色々考へて見ると、例へば高い山より市中を見をろしたる有樣、何にの爲めに後生の一大事を忘れてぐず〳〵して居るか。斯樣に何をして働くのも皆食べるため着る爲め住む爲め、其衣食住を充分になして何にするか。只一時の夢にすぎない。日々一つ事を繰り返し卷きかへして何にするのか、と

どのつまりは死するのみである。死んでしまへば萬事窮すの外はない。只大悲の御親の御慈悲を知らせて頂くより外はない。母上の死去も單へに吾等を御教化下されたのであります。慥かに西方淨土の阿彌陀樣が吾等を濟度せん爲にわざ〳〵長々御苦勞下されたと思ひます。これ忠子假の親だと思ふなよ、決して假の親ではないよ、吾は西方淨土の阿彌陀なりと。あー難有い南無阿彌陀佛〳〵。此夜は母上の初七日の當夜であり た。

○二十日。嗚呼思へば誠に難有ことであります。子供の寢てをきた時にもかさん〳〵と呼ぶ聲を聞て思ひ出したのである。『子の母を思ふ如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來遠からず、如來を拜見うたがはず』の御文の通、私も朝起きて世の中に立ちて如何に今日は仕事をなさんかと思ふとき、只南無阿彌陀佛、をかさんと大悲の親樣の御名を呼ぶのである。嗚呼今日は思へば母上の危篤にならせられし日なり。ほんに今朝御墓に參りたと、殊に喜ばして頂いたのである。忠子よ此世の事に執着しなさんな、此世は假の世である。後世の一大事を知らしていたゞいたとは、さても〳〵〳〵難有い南無阿彌陀佛々々々々。

○二十五日。今日は四七日の御佛參いたし、例によりて御墓に參らしていたゞきました。歸りて寺の世話をさしていたゞきました。午後三時すぎに坊は休みました。其寢顏を見てふと思はして頂きました。嗚呼坊やそなたは母親がないから可愛そうである。併しながらどうぞ此世は僅か四十年か五十年、後生の一大事を間違へず伯の跡母をついてきてくれよと、子守歌に歌つてをる間に、嗚呼此れ坊よ此伯母を假の親だと思ふなよ。又此れ坊やそなたの祖母を不實な祖母と思ふなよ、此忠子は御影で今は南無阿彌陀佛の身とさせていたゞいたのである故に、御前の祖母樣よりの御命令の母だよ、假の親だと思ふなよと、稱名相續させて頂いたのである。

其内又思ふた此世の事に執着しないで少しは御稱名相續させていたゞかんと定めたところが、二三十分は落涙のみで大恩をよろこばしていたゞいたのである。嗚呼長い間如來樣の御胸を痛めました々々々々々。嗚呼不孝の子でございます。どをぞ〳〵御許しなされて下されませと思ふと實に難有い尙ほ長い間作りた罪も消してくださるとは實に勿體ない。地獄より外に行き處のない此私をほんにどこがとりへの御慈悲やらと、只々、感謝の意あるのみ。南無阿彌陀佛〳〵〳〵。

○八月七日。此日は朝佛參して金林に參りました。途中一人なりしゆへ御法義をよろこばしていたゞくつもりの處、遂に友にさそはれて別によろこびもせず、俗談のみにて歸りましたのである。然し難有ことには心の中に何時思ひ出さしていたゞいてもうれしく難有、南無阿彌陀佛〳〵〳〵。坊を連れて佛參いたしたが、心の中にはどうぞ早く坊も聞いてくれよと思ふたのである。祈る如く思ふて居るのである。嗚呼難有こと、何時死んても行く先きは大安心。嗚呼心には左樣思ふたのである一人で喜ぶと思ふなよ、一人は二人、二人は三人、出るにも入るにも大悲の御親と忠子となり。誠に難有御座います。『戀しくば、南無阿彌陀佛を稱ふべし吾も六字の内にこそすめ』。

○九月四日。嗚呼心はいつも『攝取の心光は常に照護し給ふ、すでに能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋憎の雲霧常に眞實信心の天を覆ふ』の御文を思ひ浮べ誠によろこばしていたゞいたのであります。折しも調度佛參が始まりましたから御禮さしていたゞいた。其間も誠に難有い、長い〳〵御經も皆な御救ひ下さる事を御讀み下さると思ふと、尙一層難有くてたまりません。無我になりて聞くと御經は何となくありがたい、御內佛へ御禮のときは殊に落涙いたしいろ〳〵喜ばしていたゞいた。あゝ何をいふても人生は一旦の浮生なり、後世は永生の樂果なり。南無阿彌陀佛。

（次號完結）

時報

夏季傳道の行李を解きて未だ一月ならざるに又も關西の旅に出でざるべからざるに至れり。それは本月五日より本山に於て教學商議會を開かるゝを以て之に出席し、其序を以て國元の報恩講法事を執行し、且つ小兒の披露をなさんが爲なり。本月三日午後三時四十分、學舍の人々に送られて出立す。窓外秋氣清らかに小春日和の溫さ、云はん方なし。小兒嬉戯して日移るを忘れ、又呱々として人の夢を破る。四日午前國元に着し、此日午後予は獨り出立して京都に出づ。五日教學商議會開かる。此日教如上人御祥月御命日なるを以て花の間の說教を命ぜらる。上人の當時法運梗塞の昔を回想して感尤も深し。此日母妻子三人西上し來る。六日一家共に本山朝事に參詣し、續て大谷の祖廟に詣づ。幸に御法主臺下の讀經を拜聽し、廟下にて稽顙して感激言はん方なし。予は會議の爲め朝より夕に至るまで寸暇なし。七日會終りて晩、松本雪城氏の迎を受け、伏見別院に於て講話す。同會は同地の四方卯之助氏の熱心によりて成立する所にして、此夏初めて出席し、今亦再び出席す。有縁不可思議也。八日法隆寺磯長に詣て、奈良に宿り、九日江州に歸る。十、十一の兩日法事を營み、十二、十三、十四、十五の三晝夜に渡りて報恩講を執行す。森嚴なる影向の梵莚感謝極なし。十六日門徒信徒を招きて兒文常の披露をなす。即日出立、十七日朝五時半新橋着、同九時學舍日曜講話を開きて二週間ぶりに御同朋に會す。

求道會舘設立喜捨金
受領報告（第四十一回）

一金拾圓也	名古屋	麻生二郎殿
一金五圓也	多度津	丸尾猪太郎殿
一金參圓也	丸亀	うしほ會殿
一金拾圓也	富山	富山有志者殿
一金貳圓也	越中	井澤淸三郎殿
一金拾圓也	東京	故菅瀨令夫人殿
一金貳圓也	東京	松下要子殿
一金五圓也	大森	田中みな子殿
一金五圓也	東京	瀧澤三郎殿
一金貳圓也	鹿兒島	松見心華殿

小計金五拾四圓也

通計參千貳百參拾貳圓〇四錢也

右御寄附を恭うし難有く奉存候玆に謹みて奉感謝候也

近角常觀著作書目

訂正增補 信仰の餘瀝
第十版 定價卅錢 郵稅四錢 珍袖美本

親鸞聖人の信仰
第貳版 定價七十錢 小包料八錢

人生と信仰
第貳版 定價卅錢 郵稅四錢 珍袖美本

懺悔錄 附錄『歎異鈔』
第五版 定價廿錢 郵稅四錢 珍袖美本

申込所
求道發行所

帝國大學教授 文學博士 高楠順次郎先生新著

國民宗教

新案裝釘四六版箱入
價 七十錢
郵稅 八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著なり苟も日本の國民たるものの日本の宗教家たるものは一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◉附錄として研究上修養上極めて重要の論文十編を收むこれまた實に學界及教界の珍たり

東京東貯 小石川區原町六八六五 東京小石川一 東京東貯 小石川區原町三五三 東京小石川一 丙午出版社 鷄聲堂

前外務大臣 伯爵 林 董 閣下纂譯
好評三版

修養の模範

定價七十錢
郵稅八錢

前文部次官 澤柳政太郎 先生著
好評五版

退耕錄

定價一圓
郵稅八錢

顯明院題字
攝護庵圓輪師述

二尊一致錄

平松理英師校補

クロス製 四六版五七七頁
定價一圓二十錢
郵稅八錢

香樹院題字
攝護庵圓輪師述

信行自在錄

平松理英師校補

定價八十錢
郵稅八錢
クロス製 四六版三五六頁

右兩書は眞宗大谷派の碩學香樹院師の門下に富樓那と稱せられたる圓輪師が善導大師の釋文と圓光大師の登山狀を讃題として法話せられたる筆記にして本會平松監督が校訂增補せられし書なり苟も說教に志ある法師自家修養に志ある諸氏は一本を購求して研鑽せられなば唱導の術に於て信念の皷吹に於て必ず得得る所あるべきなり。

東京府荏原郡品川町九十五番地
發行處 眞宗法話會出版部
口座番號七五三六番

最上好の期の寶勿論遺

豫約募集

先生述 文學博士 前田慧雲

明治巳酉初夏、學德ともに高く一世の師表と仰がるゝ前田博士が、佛世尊最後の遺訓を提げ、之を講ずること穩健眞摯にして而も條理明晰、法門の深奧を發揮し、淳々娓々、人の肺腑に徹せざれば止まざるの概あり き。
本書は右旬日に亘れる講演を筆錄せるものにして、苟も佛の慈訓に浴せるもの、宗派の如何を問はず、又僧俗たるとの別なく、俱に三讀せざるべからざるの良書なり。

佛遺教經講話

菊版 二百餘頁 金一冊 頗る美本
定價 六拾錢 郵稅 六錢

豫約價郵稅共金五拾五錢（豫約申込前金を要せず）
申込期日十月二十日限り製本十一月二十日
豫約申込法（往復はがきにて住所姓名及所要の部數を明記して申込あれ

發光所 神戸市中山手通四丁目 振替口座東京一〇五一〇番 靈光社

靈光

靈光は信仰修養の良指針にして家庭の好伴侶なり
靈光第三年第八號より前田慧雲博士の親鸞聖人御傳鈔講話を每號連載し其他大家の玉稿を滿載せり
▲一部參錢郵稅五厘 ▲半年貳拾錢
▲一年參拾六錢郵稅共

發行所 神戸市中山手通四丁目 靈光社
【振替口座東京一〇五一〇番】

特價期限切迫

浩々洞編

佛教辭典

佛教本典の要語、各宗教義の術語は勿論、國史國文等を始めとして苟も佛教に關する所のものは、梵漢和に亘りて殆んと之を網羅し盡したり。その解釋の引諦まりて簡明平易なること、世間讀書家の一日も座右に缺く可からざることは、佛教界の『言海』として宗教家、教育家其他各方面の一般讀書家に謹告す。

十一月十日まで一萬部限り
特價金一圓七十錢（小包料十二錢）
定價二圓　小包十二錢　東京市内四錢

製本既製即時發送
見本進呈　往復はがきにて申込まれたし

文學博士　南條文雄　著

同朋心得　十ケ條講話

定價十二錢　郵税四錢

眞宗の御同行が日常是非共心得ねばならぬことを南條先生が丁寧に御話になりたのを多田先生が懇ろに註を書き加へた、たれにてもよくわかる親切なる書物であります。

多田鼎　纂譯

新刊　佛傳涅槃篇

卷頭涅槃像コロタイプ版
釋尊傳道地圖挿入
四六版四百ページ美本
定價八十錢　郵税八錢

大聖釋尊は、我人生の靈也。高く衆聖を拔き、廣く群賢を懷いて、巍然として世界の史上に立ちたまふ。中に就いて涅槃は、實に世尊大化の終局にして、佛德の圓現亦正に此に在り。是を窺ふは、一は此靈德を仰ぐ所以にして、又一は我人生の歸趣を知る所以也。是を以て、今自ら揣らず、大小兩乘の涅槃經及其他千餘部の聖典に本つき具さに此涅槃の聖迹を叙せり。義に私を加へず、文に據る所あり。是によりて些かだも我大聖の尊容が、現代の人心に映ぜむことは譯者の懇念已む能はざる所也。

譯者謹白

東京巣鴨二ノ三五　無我山房　振替東京三一二二番

新刊廣告

近角常觀校訂

冠頭　唯信鈔文意

全一冊　十月下旬　發行豫定
定價一冊七錢　郵税三冊迄貳錢
部數に應じ充分割引す。

右唯信鈔は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、唯信鈔文意は本書を弘く世に行はしめんが爲め、聖人特に文意を著して、愚癡無智の輩に授け給へるものとす。聖人に文意の著あるに見ても唯信鈔の他力信仰上必須の聖典たるは知る事を得べし。「歎異鈔」を初めとして聖人一代の化導、多く此書に淵源すと言ふも過言に非るなり。爾るに世久しく此の聖典を忘る。玆に本所感ずる所ありて、此の兩書を一冊にまとめて對稱拜讀に便ならしめて刊行す。校正を嚴密にし、冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同胞諸君には是非に一讀を冀ふ。

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

明治四十二年十月十二日印刷
明治四十二年十月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

大賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂

規定

一　本誌は毎月一回一日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一冊に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

前號要目

求道
◎前念命終、後念即生　自督
◎郷里震災地より　講話
◎唯一の信　聖傳　近角常觀
◎チャータカ釋尊傳　第二十九　鴉の喧嘩
第三十　舞孔雀
第三十一　魚と其妻
第三十二　哀なる鴉の話　告白
◎不可思議の味ひ　慶讃　無濱田謙恭
◎十七憲法　第二條　時報
◎菅瀬師令夫人を弔す◎感謝
▲家庭と信仰

求道第六卷第九號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十二年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）
東京市麹町區番町十七ノ一　三光堂印刷